

平成25年度変容の危機にある無形民俗文化財の記録作成の推進事業

青森県南部地方の虫送り

— 青森県南部地方の虫送り調査報告書 —

文化庁



平成25年度変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業

― 青森県南部地方の虫送り調査報告書 ―

青森県南部地方の虫送り

例言

一、本書は、文化庁の平成25年度「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成推進事業」の一環として実施した「青森県南部地方の虫送り」の調査報告書である。

二、調査は、文化庁が示した「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成推進事業」に係る報告書作成業務の手引きに基づき、それにしたがって実施した。

三、本書は、青森県南部地方の各自治体担当部課や教育委員会の協力を得て、平成25年に実施が確認された11カ所の虫送り行事・人形送り行事を調査対象とした。

四、本書は、4名の執筆者がそれぞれの担当行事の調査にあたり、分担して執筆した。

五、青森県南部地方では、「虫追い」は「ムシボイ」と発音するのが一般的である。そのため本書では、「虫追い」を「虫ボイ」と標記した。

六、虫送りで用いられる紙や布を掲げた幟(のぼり)は、ノボリ、ハタ、ノボリバタ、カミバタなど、さまざまな呼び名があり一定ではない。本書では、それぞれの実施場所で住民が呼び習わしている呼称を、そのま

ま記載した。

七、写真は調査に随行した撮影担当者が撮影したものを掲載した。ただし、日程の都合上撮影できなかった一部の行事については、各自治体、保存会などから写真の提供を受けた。その場合は、平成25年以前に撮影されたものも掲載した。

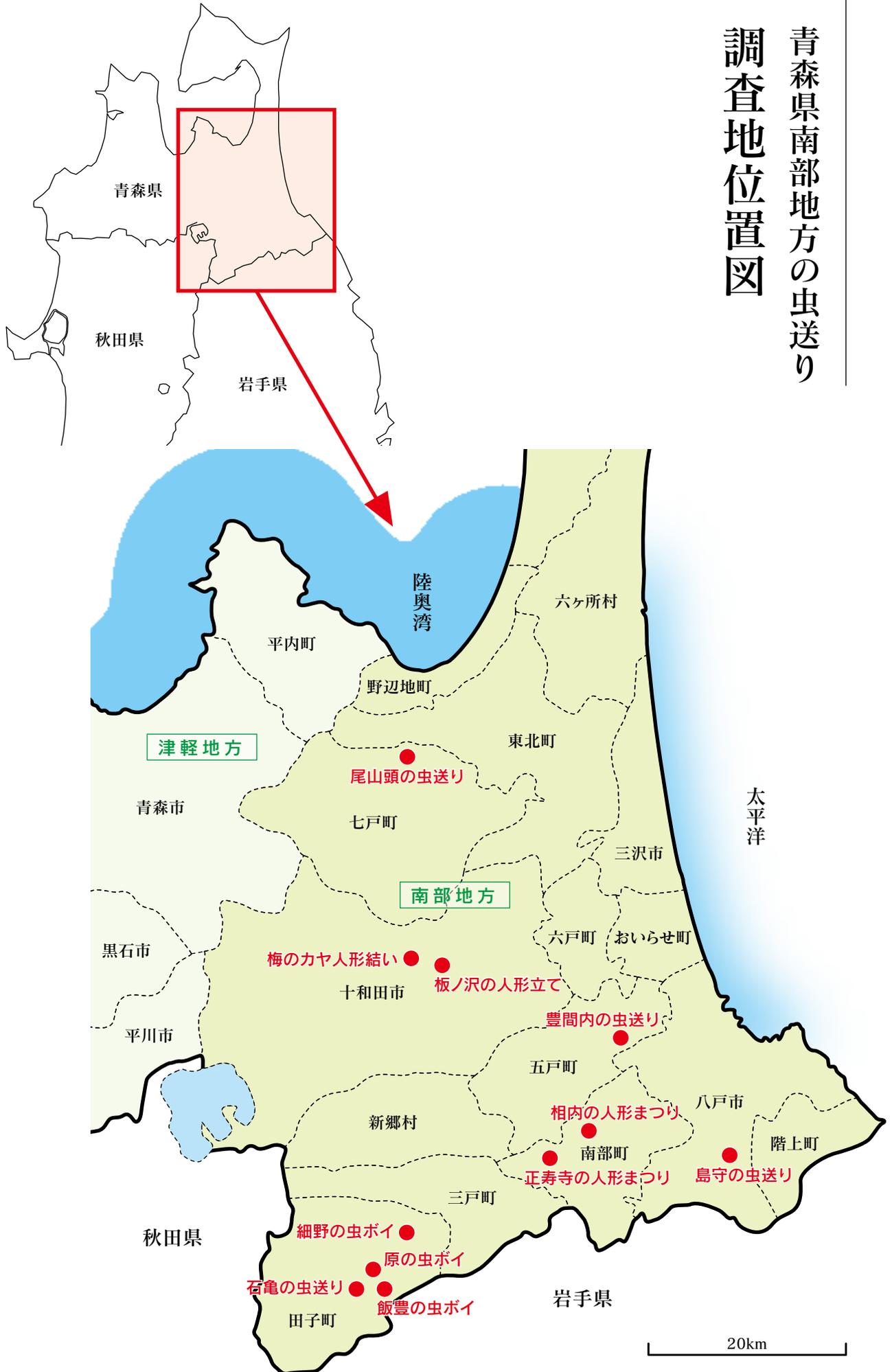
八、本書の編集は、NPO法人あきた地域資源ネットワークがあたった。

平成25年度 変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業
青森県南部地方の虫送り調査報告書
青森県南部地方の虫送り

目次

例言	2	◇青森県南部地方で伝承が途絶えた主な虫送り	50
目次	3	◇岩手県北部地域の虫送り	53
調査地位置図	4	第三章 虫送りに関連する人形送り、人形立て	57
第一章 青森県南部地方の虫送り概要	5	七戸町尾山頭の虫送り	58
青森県南部地方の虫送り概要	6	南部町正寿寺の人形まつり	64
第二章 青森県南部地方の虫送り	9	十和田市板ノ沢の人形立て	73
田子町飯豊の虫ボイ	10	十和田市梅のカヤ人形結い	82
田子町細野の虫ボイ	17	参考文献	90
田子町石亀の虫送り	24	調査協力者	91
田子町原の虫ボイ	29	執筆者・撮影者	92
南部町相内の人形まつり	34		
八戸市島守の虫送り	42		
五戸町豊間内の虫送り	46		

青森県南部地方の虫送り 調査地位置図



第一章

青森県南部地方の虫送り概要

青森県南部地方の虫送り概要

1 青森県の虫送り

本州最北に位置し、三方を海に囲まれた青森県は中央部の八甲田山を境にして東の南部地方と西の津軽地方に分けられる。さらに東部の下北半島部を下北地方に分ける場合もある。この東西の地域は風土環境が大きく異なる。南部地方は地形的に山地や丘陵が多く、さらに夏期には冷涼なヤマセとよばれる偏東風が吹き稲作に不適な地域であった。そのため、生業の主体は畑作や畜産であった。戦後になって開田が進み稲作の割合が多くなっている。一方、津軽地方は広い沖積平野を有し、ヤマセの害も少なかったことにより、稲作が主体である。また、明治以降はリンゴ栽培も盛んになった。近世においては東部が南部氏（盛岡藩及び八戸藩）、西部は津軽氏（弘前藩及び黒石藩）の支配領域であり、歴史的な背景も異なっている。

本書は、青森県南部地方の虫送り行事の調査報告である。虫送り行事とは稲作に害を及ぼす虫を追い払う行事である。田植え後、村人が行列を組んで村境まで送るなど集落を単位とした共同祈願の儀礼である。全国的に行われてきた行事であるが、その形態は地方によりさまざまに異なる。『日本民俗大辞典』によると「西日本に多く虫追い・サネモリオクリ（実盛送り）・ウンカ送りなどともいう」とあるが、南部地方のみならず本県全域においてもサネモリオクリやウンカ送りという名称はみられない。昭和50年（1975）に調査が行われた『青森県民俗分布図』によれば調査地区

の半数近くで虫送（おぐり）や虫追（ぼい）などが確認されている。

同書によれば、津軽地方が概ね虫送（おぐり）で、南部地方が虫追（ぼい）が多くみられる。また、下北地方は虫送りに関しては希薄地帯となっている。行事の主体は集落であり、寺社の関与はあまり認められない。かつては『青森県民俗分布図』にみられるように相当数の集落で行われていたが、戦後になってやめた集落が多い。詳細な調査が行われていないが、現在、津軽地方では数カ所で行われているにすぎず、下北地方では全くなくなったと思われる。特殊なケースとして五所川原市での観光行事としての「奥津軽虫と火まつり」があげられる。

今回の調査によって、現在も南部地方で行われている虫送り行事は11カ所が確認されている。ただ、この中には後述のように虫送り行事と同様の扱いにしてよいかという事例も含まれているが、関連する類例という観点から本報告に記述することとした。

2 南部地方と津軽地方の虫送りの比較

前段で述べたように青森県は東の南部地方と西の津軽地方では風土性や歴史が異なるが、虫送り行事にも差異がある。『青森県民俗分布図』をみると、南部地方と津軽地方の虫送り行事の名称が明瞭に異なるのがわかる。そのほか行事内容にも相違点がみられるのでそのいくつかを次にあげてみる。

① 実施日……現在、南部地方で行事が行われている日はさまざまであるが、もともとはそのほとんどが旧6月24日であった。それに対し、津軽地方ではサナブリの日に行われる。集落内の田植えが全て終了するとサ

ナブリという作業休みが設定され、この際に虫送りが行われてきた。

② 藁人形^{わら}など……南部地方の虫送り行事で製作し使用されるものは、藁などで作った人形や「悪虫退散」などと書かれた幡（ハタ）である。ただ、これらについては各集落によってその様態は異なる（詳しくは後述）。一方、津軽地方においては「ムシ」とよばれる藁製の蛇体や龍体が作られ、それに藁人形が付随する集落もみられる。この津軽地方の蛇体や龍体は全国的にみても特殊なものだとされている。

③ 行列に付随する芸能等……南部地方の虫送りに芸能などが付随することはさほど多くない。しかし、津軽地方においては虫送りの行列の先頭に荒馬や太刀振りと呼ばれる芸能がつく場合が多くみられる。また、五所川原市域などでは行列に仮装した人たちが加わるのも特徴的である。

④ 送りの方法等……南部地方では行列の人形を最終的に送る方法は、村はずれに立てたり、谷川に投げたり、燃やすなどさまざまである。それに対し、津軽地方ではほぼ村はずれの木などに掛けるのが一般的である。

⑤ 虫札……南部地方では田畑に虫除けの札を刺したりすることは多くないが、津軽地方では寺社で刷つてもらった虫札を田畑に刺すのが一般的である。

このように南部地方と津軽地方では虫送り行事の様態が異なるが、津軽地方でも、南部地方との境に位置する東津軽郡平内町浦田では、田植え後の適当な日に行われる津軽的な「虫送り」と、旧6月24日に行われる南部的な「人形送り」の両方が行われていたことも付記しておく。

3 南部地方の虫送り

今回の調査で確認された南部地方の虫送り行事の概要についてもう少し詳細にみてみよう。虫送り行事の呼称についていえば、「ムシオグリ（虫送り）」、「ムシボイ（虫追い）」、「ムシマツリ（虫祭り）」などがあり、関連するものとして「ニンギョウウオグリ（人形送り）」、「ニンギョウボイ（人形追い）」がある。後述のようにこれらが複雑にからまっているのが南部地方の虫送りの特徴といえる。

調査内容を概観すると南部地方の場合、行事に使用する藁人形と幡（ハタ）から3つのパターンが認められる。①幡のみを使用する虫送り、②幡と人形を使用する虫送り、③人形だけを使用する虫送りである。

①は八戸市島守、五戸町豊間内がこれにあたるが、田子町石亀及び田子町原についてはもともと人形もあつたものが人手不足などで人形製作がなくなったものである。②は田子町飯豊、田子町細野、南部町相内と前記の石亀と原がこれにあたる。しかし、行列が集落や周辺の田畑を巡ったあとの人形の処置の仕方がさまざまで一様ではない。

③については、厳密にいえば①②の虫送りと同一行事



幡と人形を用いる田子町飯豊の虫送り行事



現在は幡のみを用いる田子町原の虫送り行事

にあたらぬものも含まれる。本書は南部地方の虫送りの調査報告書ではあるが、「地域社会に災いをもたらす神を送り出すための鎮送の行事」（『日本民俗大辞典』）である「神送り」の一つという視点から③のグループも記載することとした。

③の一つである七戸町尾山頭おやまがしらの場合は、行事名称が虫送りであるが、内容は人形を村外へ送り出す「人形送り」の行事といえる。また、十和田市板ノ沢と十和田市梅の場合は明確な行事名称はなく、「人形結い」（人形を作るの意か）といっており、送るための行列はなく製作した人形を村はずれに運んで立てておくだけである。いわば道祖神的なタイプといっ

てよい。ただし、もともとの実施日は旧6月24日というように虫送りとの関連性について考慮しなければならぬであろう。南部町正寿寺しょうじゅじの場合は現在「人形まつり」（「人形ボーイ」ともいう）が行われているが、かつては別の日に「虫ボーイ」も行っていたという。このことから、かつて南部地方各地では、「虫送り」と「人形送り」の両方を

行っていたとも考えられ、そして両方が習合してひとつだけの行事になったケースもあるのではないかなどさまざまな推論ができる。このように南部地方の虫送り行事は多様であり今後の研究に期待したい。さらにいえば、隣接する岩手県北部（旧盛岡藩領）の虫送りや人形送りとの比較、今回の調査では対象にしなかった上北郡北部や下北地方のヤメボーイ（病追い）や津軽地方の「ポーの神」、「鹿島流し」などとの関連性についても検討されるべきであろう。

4 行事の消滅と存続

かつては多くの地域で行われた虫送り行事は見る影もないほど数が減少した。奇しくも十和田市梅が後継者難のため、調査の行われた平成25年でもって中止することに決定されたのは残念なことである。各地で止めた時期は主に戦後の昭和30～40年代のことであろう。その理由は農耕技術の進歩や農薬等の普及により、呪術的といえる行事の必要性を感じなくなったり、信仰心も薄らいできたことに加え、過疎化による人手不足が拍車をかけたことなどが考えられる。

近年は地域おこしの一環として伝統行事が注目されている。地域に活力を与えるだけでなく地域住民の結びつきが強化される効果も期待できる。復活した五戸町豊間内の虫送りまつりがこの好例であろう。県の無形民俗文化財に指定されている細野や飯豊は組織も住民の伝承意欲もすっかりしているように感じるが、文化財指定が励みになっているためであろうか。さらに、同じ田子町の石亀で復活したのは近隣で盛んな状況に刺激を受けたのかもしれない。

第二章

青森県南部地方の虫送り

田子町飯豊の虫ボイ

たっこまらいいとよむし

【実施地】

三戸郡田子町原大字飯豊

【地域の概要】

飯豊集落は、田子町の南東部に位置している。国道104号(秋田街道)に沿った原集落の南側を流れる熊原川を渡ると、間もなく飯豊集落に至る。道路を挟んで住宅が密集し、田畑や山林に囲まれた戸数56戸の集落である。畑作と稲作が多い地区であるが、近年若者は会社勤めのため、農業従事者の高齢化が進んでいる。南方は岩手県である。

【行事の名称】

飯豊の虫ボイ

「追う」の方言は「ぼう」で、「追い」は「ぼい」になる。

【行事の由来】

由来についての記録はない。古老の伝承によれば、江戸時代からの行事で、2000年以上は続けられてきたという。悪虫退散、五穀成就、健康



1.飯豊集落遠景

祈念である。

【実施の月日】

7月28日(以前は旧暦6月24日に行われた。その後、新暦7月24日となり、現在は24日に近い日曜日)

【文化財指定】

青森県無形民俗文化財 昭和58

年(1983)1月20日指定

【行事の主体】

飯豊自治会

【参加者・担い手など】

行事の準備は老壮年代の男女であるが、行列には子ども、準備に参加できなかったお年寄りも加わる。

【行事の実施内容】

〈準備〉

行事の準備は、老壮年代の人たちが集落内の小高い丘の上にある法呂神社境内に集まり、作業を行う。

平成25年7月28日は、朝から雨が降り開催が危ぶまれたが、準備を始める午後には雨が止み、作業が始まった。雨天の場合は中止せざるをえないという。男性は藁人形、幟作り、女性は紙旗への文字記入、拝殿や境



3.シベは境内で焼却処分される



2.稲藁のシベ取りは大勢で行う

内の清掃や草取りなどを行う。

〈人形作り〉

人形作りは、稲藁(品種・つがるロマン)のシベ取りから始める。昔は稲藁よりは背丈の長い麦藁や燕麦えんぱくの藁を、各家から一束ずつ持ち寄って人形を作っていたが、麦が段々少なくなり稲藁に変わった。現在、稲藁は集落内の人が秋の稲刈り時に次年度の虫ボイに備えて、準備している。シベはまとめて境内で焼却する。

男と女の2体、手、足、男性器、女性器などの製作を分担し、作業を行う。

〈胴体の作り方〉

① シベを取った藁を直径15〜20センチの束にし、穂先側ではなく太い方の下部15〜20センチくらいのところを縄で縛る。穂先側を縛ったところから外側に、180度にすべて太い方を覆うように折り曲げる。折



4.穂先を上にし下部を縛り、折り返す



5.藁を外側に折り返していく



6.折り返してから縛る。太い方が頭部となる



7.腕となる藁を胴体の中に挿しこむ

り曲げたら20センチくらいのところを縛る。ここが頭部となる(写真4・5・6)。頭部、胴体、手、足など縄で藁を縛って折り曲げ作っていく作り方が、ここの人形作りの特徴である。

② 両方の手と胴体の中に藁を挿しこみ(写真7)、腕がずれないように胴体を縛る。藁を足しながら胴体を太くするが、縛っては折り曲げを繰り返す折り曲げ方法で行う。足も手も胴体と同様に、藁を足し、折り曲げの方法で作ると、見た目が良い人形となる(写真8・9・10)。

③ 手と足の甲は、まず5本の指の形がわかるように作る。藁20本くらいを振なじり、二つに折り曲げ縄状にする。振じれがほどけないように1本ずつ縛る(写真11)。長さの違う5本の指を、手の形になるよう指の付け根のところには、藁を横に交互に入れ(写真12)、手を形作る。足も手と同様に作るが、足の指を少し太くして作る(写真13)。手足ができたなら手首と足首に縛りつける。



8.胴体に藁を足し、縛り、折り曲げを繰り返す



10.腕の膨らみをだすため折り返す作業



12.手の完成



14.女陰は、毎年同じ人が作っている



9.両足も藁を足し、縛り、折り曲げを繰り返す



11.手、足の指は丁寧に作る



13.足は手より太くして作る



15.丸くすると女陰の形である

④ 女陰は藁を三つ編みにし、穂先の長さが15センチくらいになるように三つ編みから垂れ下げ、最後は楕円形にして、女の藁人形につける。かなりグロテスクな仕上げである(写真14・15)。

⑤ 男根もかなりグロテスクである(写真16)。男根は、稲藁の穂先とは反

対に太い方を折り曲げて作る。折り曲げる際、先端を棧俵さんだわらのように作るが、中心部の6、7本の藁には手を加えず、先端に延ばしておく。非常にリアルである。根本の方は伸びている藁を縄で丁寧に巻き、太くする。人形に取りつける際は、竹串で差しこみ、男根についている藁紐ひもで縛りつ



17.女藁人形の完成



18.男藁人形の完成



19.半紙に書かれた紙旗。白丸の中が三引両



20.竹に取りつけられた紙旗



16.胴体に取り付けられた男根と辜丸

藁紐で縛る。顔は当日、絵の上手な人が半紙に描く。手の込んだ藁人形と違い、単純ではあるが男女の顔絵である(写真17・18)。ここまできると、藁人形の完成となる。以前は、女の藁人形の頭には野の花が飾られていたと言うが、今は飾られていない。男の藁人形の大きさは1.3メートルである。

け、グラグラしないようにしておく。辜丸は握り拳大の大ききで、ぐるぐる巻きにして作り、縄紐をつけ男根の下にぶら下げるように縛る(写真16)。

⑥ 藁人形二体に、男女の顔を描いた半紙を男は太縄で、女は三つ編みの

〈紙旗作り〉

田畑などに立てて、悪虫退散、五穀豊穣を願う紙旗作りは、藁人形と同時進行で準備する。

① あらかじめ目星をつけておいた5メートルくらいの竹を、奉納者の人数分(25年度は37人の名前を記入した紙旗18本作成)だけ採ってくる。

② 竹は上部の葉だけ残し、枝や皮をはいでおく。

③ 竹につける文字を書く半紙には、「三 奉納 悪虫退散 五穀成就 天下泰平 家内安全 奉納者名」と縦書きにし、3人で手分けして書く(写真19)。横長の「三」は三引両である。奉納者名は田畑所有者の子どもの名前を書く。奉納者の希望で、紙一枚に兄弟一緒か、別々に書く。

④ 奉納の紙は、竹の上部に取りつけるので、風が吹くとはためく。神事の際は、向拝前に安置する(写真20)。



21. 準備が整い、神事が行われる



22. 神事の前に拝殿前に安置された男女の藁人形と供物など



23. 神社から藁人形を先頭に、笛や太鼓などの行列が出発する



24. 集落内を行進する行列

〈準備完了〉

40人ほどで午後1時から行われた準備作業は、2時間ほどで完了した。

〈出発前の神事〉

神事は神職によって進められる。参列者は、約40人である。

向拝前には、右に男藁人形、左に女藁人形、供物の人参、塩、わかめ、ゴボウ、煮干し、トマト、お神酒、太鼓、ジャ鉦(手平鉦)、笛、幟2本(奉納 青森県指定無形民俗文化財 飯豊虫追 飯豊自治会)「祈願 悪虫退散 五穀成就 天下泰平 国家安康 四海万福」の文字、紙旗などが並ぶ。(写真21・22)。神事の最後には、全員でお神酒をいただいでから、藁人形の行列が神社を出

〈行列に持参する物〉

男女の藁人形、太鼓、笛、ジャ鉦、紙旗、幟

〈集落内の巡行〉

3時を少し過ぎ、藁人形2体を先頭に、幟2本、笛3丁、太鼓2張、ジャ鉦3口、それに紙旗を持つ老人や子どもなど、総勢40人で行列を作り、集落内にある神社境内から階段を下り、一行が出発する(写真23・24)。かつては子どもも多く現在の2倍以上の参加者がいて、とても賑やかであったと古老が語っていた。

藁人形の行列は、神社から集落内を通り、村の西側、佐羽内との境方面に向かう。笛や太鼓、ジャ鉦などで囃しながら賑やかである。太鼓のリズ



25.藁人形の一行が、田園地帯を賑やかに行進する



26.子どもたちも紙旗を持って参加する



28.所有者の田んぼに来ると、紙旗を田んぼに刺し、悪虫退散を願う



29.本来であれば石碑前で藁人形を焼くが、この年は雨天のため、翌日に焼いた。黒灰が人形の焼け跡である。虫追い3日後の撮影

ムは「ダンツコ ダンツコ ダンツコ」を5回繰り返してから、「ダンツコ ダダツコ ダンツコ ダンダン」「ダンダンダンダン」ダダツコ ダンダン」とテンポが速くなる。以前は「ホイー ホイー」と囃したたというが、今年は囃子の掛け声はなかった。しかし、藁人形を持つ2人は人形を上下に動かし、また竹を持つ人たちの紙旗も風でなびくなど、悪虫退散、五穀豊穡の願いが込められた様相を呈している(写真25・26)。

行列が田んぼに進んだころ、雨足が次第に早くなってきた。例年であれば、村外れで人形踊りを行うのであるが、今年は途中で引き返すことになった。引き返す途中、紙旗を持つ人の中には、それぞれの田んぼに、悪虫退散の願いを込めて、紙旗の竹を刺していく人もいる(写真27・28)。



27.紙旗は風で倒れないように、しっかり刺す

再び集落に帰るころには雨にもかかわらず、行列に加わる人たちも増えてきた。田畑が道路に面していない家では、家の門前や道路端の屋敷内に紙旗を立てかけている。しかし、あいにくの雨で、野面平のむてたいや四十渡しじゅうわたりの東側の村はずれの田畑の方に行く予定は、とてもこの雨では行けないと判断し、集落だけを回って集会所である飯豊生活館前で、終了することになった。

雨さえなければ、野面のむてにある平耕地整理功労者の「佐藤辰間氏頌徳碑」(昭和3年5月建立前に行き、人形踊りを行い、藁人形を焼くのであるが、雨足が強く天気回復が見込めないため、中止となった。藁人形は天候を見て後日焼くこととした。飯豊では以前、藁人形をこの場所に立てかけておいたが、15、6年前ごろから藁人形がくずれ、みつともないのとど燃やされることになった(写真29)。

藁人形の行列に対して、かつては家の前を通ると人形に餅を供えたり、塩を撒いたりした。また、藁人形は今日のように燃やされたりせず、村のはずれに1体ずつ置いてきた。

生活館に帰って来た参加者は、引き続き全員で慰労会を行った。

【飯豊の虫ボイの特徴】

飯豊の虫ボイの特徴は、紙旗と藁人形を賑やかな笛や太鼓で囃しながら、集落や田畑を巡り、悪虫退散、五穀豊穡を唱え、集落の境に藁人形を1体ずつ置く行事であった。しかし、現在ではその特徴が変化し、2体の藁人形と一緒に耕地整理功労者の石碑の前で燃やされるようになった。

【行事の存続】

人形を作るのは老人層であるが、若者たちも行列に参加するなど、行事に対する住民の意識は高いと思われる。県の文化財指定であることに誇りを感じているのではないだろうか。幅広い年齢層の参加は地域の結束にも役立っている行事である。



30. 紙旗には子どもの名前も書かれている

田子町細野の虫ボイ

たっこまちほそのむし

【実施地】

三戸郡田子町相米細野

【地域の概要】

細野集落は、田子町役場より北西に約2キロのところに位置している。国道104号から県道21号に入り、ほどなく県道から分かれ、西に向かうと戸数24戸の細野集落である。葉タバコを始め、ニンニク、野菜類、

リンゴ、和牛(昭和55年に幅野義久氏が農林大臣賞受賞)、米などを生産しているが、最近では会社勤めの若者が多くなっている。

【行事の名称】

細野の虫ボイ

【行事の由来】

田畑の悪虫退散、五穀豊穡、家内安全などを祈願するが、いつごろから始まったのか、詳しい由来などはわからない。

【実施の日】

旧暦6月24日(平成25年は7

月31日)

【文化財指定】

青森県無形民俗文化財 昭和58年(1983)1月20日指定

【行事の主体】

細野虫ボイ保存会

【参加者・担い手など】

集落住民の老若男女

【行事の準備】

産土神である稲荷神社境内で、男は藁人形作り、女は草取り、清掃、直会の準備などを行う。また竹に吊るす紙旗の文字書きは個人宅で、午後からの藁人形の祈祷後に行われる直会の御馳走は、女たちが自宅で作持参する。

【人形作り】

人形作りは、藁のシベ取りから始める。藁は、稲の品種の中でも背丈の長い、つがるロマンを使用する。以前は麦藁(麦稈)を使用した。

〈胴体、手、足〉

① シベを取った藁3把くらいを集め、穂先でない方20センチくらいのところを縄で縛る。



1.集落の稲荷神社



3.神社周辺の草取りをする女性たち



2.和牛が盛んな集落だけあって、稲荷神社には奉納された牛の絵馬が多い



4.頭、胴体、腕など作成



5.胴体に両腕を挿しこんだ状態



6.両腕と両足の藁をあてがい、縛る



7.足の長さを考え、藁を補充する



8.腕と大腿部が盛りあがる

- ② 縛ったところを軸に、穂先側を外側にすべて折り曲げる。首となる部分を縛ると、頭部と首、胴体の一部ができる(写真4)。
- ③ 両腕とする藁を、胴体となる頭部の下の藁の中に横にして入れる(写真5)。
- ④ 胴体には少し多めの藁を入れ、胸となるとここで手足部分がほどけないよう、しっかりと結ぶ(写真6)。
- ⑤ ここまでの作業では足の部分が短すぎるので、別の藁束を胴体につけ加え、しっかりと縛っておく(写真7)。
- ⑥ 上腕部は、筋肉を強調するため、藁を折り曲げて膨らみを持たせて縛る。また、大腿部も太さを強調するため、折り曲げた藁を取りつけて縛る(写真8)。
- ⑦ 足や手の指は、1本1本丁寧に指が見えるよう、細めの藁で縛る(写真9)。
- ⑧ 昔は1本ずつ藁で指を編んで作ったという。

〈男根、女陰の作り方〉

- ① 男根を作るには藁束を少し準備し、根もと数センチのところを縛り、さらに離して10センチくらいのところを、数本の細い藁を包むように編んでいく(写真10)。
- ② 最初に縛ったところが内側になるよう、引っくりかえすと膨らみができる(写真11)。
- ③ 膨らみの根元側を、縄でぐるぐる巻きに縛る(写真12)。
- ④ 睾丸は、縄をぐるぐる巻きで丸くし、縄紐ひもをとりつける(写真13)。2つ作る。
- ⑤ 女陰は、藁の穂先を相撲取の下がりのように垂れ下げる。ほかの残った藁で三つ編み状に編んでいく(写真14)。



9.指5本ができ上がった。昔は指を1本ずつ編んだ



10.このような状態から男根を作る



11.表・裏を引っくり返すと、このような形になる



12.グロテスクな男根である

の上手な坂下芳見さんに、竹に取りつけやすいように細工をした紙と、

【紙旗作り】
竹につける紙旗は12本で、「悪虫退散 伍穀成就 家内安全 天下泰平 四海万福 国土安康」と大文字で、左脇には「平成二十五年旧六月二十四日 田子町字細野」その下には、中学生までの子どもたちの名前が小文字で書かれている。以前は子どもがいる各家々で書いていたが、現在では書かれています。

⑥ 50〜60センチくらい編み、三つ編みを丸くするとでき上がりである（写真15）。

〈藁人形の完成〉

2体の藁人形には、額に男は太縄で、女は三つ編み状の太めの縄をハチマキのように巻き、顔の両側に幣ぬきを下げる。以前は男女の似顔絵を紙に書き、それぞれの人形に張りつけていたが、現在は顔を描かない。藁人形に男根、女陰などをとりつけると完成となる。

子どもたちの名前を書いた名簿を渡して書いてもらう（写真17）。竹の種類に決まりはないが、真っすぐな竹が良いとされる。約240センチの長さである。

【出発前の神事】

藁人形づくりなどの作業が終わると拝殿内に祭壇を設け、藁人形を安置する。左側に男の藁人形を、右側に女の藁人形を置く（写真19）。神事は、神職により執り行われ（写真20）、その後お神酒上げとなる。お神酒上げの挨拶で、神職は「細野（稲荷）神社の恒例の虫追ぼいの祭典の儀、滞りなくあいじめさせていただきます。おめでとうございます」と述べ、また、会長の挨拶などの後、お神酒を交わす。お神酒上げは盛大で、持参した料理を肴さかなに虫追いの出発まで1時間ほどの飲食である（写真21・22）。

【行列に持参する物】

男女の藁人形、太鼓、笛、手平鉦、紙旗、幟

【集落内の巡行】

午前中から始めた人形作り、午後の神事、お神酒上げと進み、いよいよ藁人形が集落に繰り出す時である。午後2時50分、行列の参加者が拝殿前に勢ぞろいする。男女の藁人形は拝殿前に持ち出され、藁人形の持ち



14. 丁寧に編んでいく



13. 牽丸は縄を丸めて作る



16. 紐がつく紙に祈願文を書いてもらう



15. 女陰の完成



18. 自分の旗を持つ子ども



17. 平成25年は12枚の紙旗を、坂下さんに書いてもらった



20. 虫追いの神事が行われる



19. 藁人形2体が祭壇に並ぶ

手によって、男根や女陰がお神酒で清められた後(写真23・24)、境内で人形踊りが始まる。両手で藁人形を持った2人は、藁人形を前に突き出し、笛、太鼓、手平鉦(写真25)に合わせて本人も踊りながら、藁人形を円を描くように右、左と軽快に振り回す(写真26)。



21.お神酒上げの料理



22.持ち寄った料理や飲み物が振舞われる



23.神社の前に並べられた人形



24.男根をお神酒で清める

細野の虫ボイは、この人形踊りに特徴があるといわれる。2人による絶妙な人形踊りは、やがて「何虫祭りや ごじよ虫祭りや 長者殿の弔いで 赤いつぼけまいらせろ」と唱えてから、男女の人形に抱き合う仕草をさせる。和合の意味である。

人形踊りを終えたら、神社から幟を先頭に太鼓2人、笛1人、男女の藁人形、手平鉦2人、旗を持つ子ども、大人の順で行列は音を奏で、藁人形はくるくる回されながら、集落を進んで行く(写真27)。やがて、集落の中心地の細野バス停前に来たら、行列は止まり、人形踊りが行われる(写真28・29)。踊りが終わると一休みし、その後また行列が動き出す。集落を進むにしたがい、太鼓の音を聞いて行列に加わる人がおり、賑やかさが出てきた。

行列の一行が細野地区集落センター前まで来ると、人形踊りを行い小休憩となった。ここでは参加者全員で、記念写真を撮り(写真30・31)、再

び行列が進む(写真32)。行列は集落の野菜畑や葉タバコ畑などのそばを通り、最終地に到着した。

いよいよ最後、クライマックスである。人形を持つ2人も、ここまでくると調子が出てきたと見え、2回の踊りを軽やかにこなした。「何虫祭りや ごじよ虫祭りや……」と唱え、2体の人形をしっかりと抱き合わせ、男の藁人形の男根を、女の藁人形の女陰に和合させた(写真33)。この状態で、子どもたちが持ち歩いてきた紙旗の竹を、12本すべて藁人形の頭や、胴体に刺し込む(写真34)。やがて、最後となる人形踊りを行う(写真35)。「何虫祭りや ごじよ虫祭りや 長者殿の弔いで 赤いつぼけまいらせろ」と唱え、集落内を回って悪虫を集めてきた2体の藁人形は、和合したまま紙旗とともに、村はずれの道路下の谷川に投げられた(写真36)。神社を出てから1時間が経過していた。

【細野の虫ボイの特徴】

細野の虫ボイは、藁人形と紙旗を作り、集落内を巡ってから村はずれの谷川に投げて悪虫退散を願うところに特徴がある。また、行列の進行中、人形踊りなどもなう。



26.軽快な音に合わせて出発前の人形踊りが始まる



25.太鼓、笛、手平鉦が音を奏でる



28.集落の中心地で人形踊りが行われた



27.いよいよ藁人形の行列が神社を出発した



30.集落センター前で、記念写真



29.人形踊りはベテランの役割

【行事の存続】

現状は集落あげての行事であり、また、県文化財指定となっており、住民の行事に対する誇りがある。今後も存続されていくことであろう。



32.村はずれに向かう藁人形の行列



31.高校生たちも楽しそうに参加する



34.紙旗のついた竹を頭や胴体に刺し込む



33.男女の藁人形を和合させる



36.藁人形2体は、勢いよく村はずれの道路下の谷川に投げられた



35.紙旗がつけられ、和合したままの藁人形踊りが行われる



37.細野の稲荷神社拝殿内に奉納された虫ボイの写真。撮影年代不明

田子町石亀の虫送り

たっこまちいしがめ むしおく

【実施地】

三戸郡田子町石亀道地

【地域の概要】

田子町は青森県の最南部、岩手県、秋田県との境に位置する。町面積の多くが山地で占められており、町を東西に流れる熊原川とその流域に沿って集落が点在している。基幹産業は畑作を中心とした農業で、特にニンニクは生産量が日本一であり、「ニンニクの町」として知られている。

調査地の石亀は、熊原川の沖積地に開けた戸数74戸の集落（写真1）。町の中央部を東西に走る国道104号沿いにあり、昭和30年（1955）に上郷村と田子村が合併して田子町になる前は、上郷村役場があった。当時は村の中心地であったが、現在は過疎化が進み、40年前の統計より戸数も30戸余り減少している。



1. 石亀集落遠景

【行事の名称】

もとは「虫ボイ（虫追い）」だったが、現在の行事形態になってからは単に「虫送り」と呼んでいる。

【行事の由来伝承】

合併前の旧上郷村の時代には、ほとんどの集落で行われていた虫送り（虫ボイ）の行事も、昭和30～40年代ころに途絶えてしまうところが多かった。その中で石亀は平成の時代になっても行事を続けていたが、人づくりの人手不足や集落の高齢化による参加者の減少などで15年ほど前に中止を余儀なくされた。それを石亀地区自治会長の穂積倉二さんが地区内にある上郷保育園に協力を呼びかけ、平成15年に保育園の行事として復活させた。現在は園児を主体とした体験教育の一環として実施している。

田子町では復活した石亀を加えると、現在も飯豊（本書10ページ）、細野（17ページ）、原（29ページ）の4カ所で虫送り行事が存続しており、南部地方におけるもつとも濃密な伝承地域となっている。石亀も田子町の他の集落と同じく悪虫駆除の行事として江戸時代に始まったと伝えられている。

【実施の月日】

旧暦6月24日（平成25年は7月31日）

【文化財指定】

なし

【行事の主体】

主催者は石亀地区自治会（穂積倉二会長）であるが、行事自体は上郷保



2.虫送りの出発地、上郷保育園

育園（工藤順子園長／社会福祉法人「くりの木会」）が主体となって実施される。

【参加者・担い手など】

石亀では、虫送りの行列に用いる紙旗を幟旗のぼりばた（以前は虫旗むしばたともいった）というが、これを持つ役目を上郷保育園の園児たちが担う。行列には先導役として石亀地区自治会から穂積会長のほか数名と、保育園の職員数名が付き添う。園児の保護者や地区内の住民は参加しない。

【行事の実施内容】

〈準備〉

いったん中止する前までの石亀の虫送り行事は、男女2体の藁人形を

作り、幟旗を掲げてお囃子を奏でながら集落をめぐる、村はずれに人形を置いてくるというもので、飯豊や細野など現在も田子町の他地区で行われている内容とほぼ同じであった。

だが、保育園の行事として復活してからは、人形づくりは行わず、お囃子の伴わない幟旗の行列のみという大幅に簡略化されたものになった。そのため、特に

準備に時間を要することはなく、用意するものも竹と虫送り祈願の文字を書いた紙だけである。

午前10時ころ、上郷保育園の職員が虫送りに用いる篠竹を2×2・5メートルほどの長さに切り揃え、竹の先のほうだけ葉を残し、その下に白い紙旗をくくり付ける（写真3）。

紙旗には他の虫送り行事

で見られるものと同じく「悪虫退散 五穀成就 家内安全 天下泰平」「悪虫退散 五穀豊穰 四海満福 国土安康」と書いてあり、その下に虫送りに参加する園児たちひとりひとりの名前がひらがなで記されている（写真4）。

〈出発前のお話〉

10時30分、保育園の玄関前に年長組12名（男の子6名、女の子6名）の園児が整列し、虫送り行事が始まる。初めに工藤園長の挨拶があり、続いて自治会長の穂積さんが行事の意味を説明する（写真5）。

「虫送りは石亀にずっと昔から伝わっている行事です。お花や野菜に悪い虫がつかないように、たくさん採れるように、ここの上郷保育園から八幡神社までみなさんと一緒に歩いて悪い虫を追い払います。みなさ



3.竹は穂積さんが前日に付近の山から採取してきたもので、20本ほど用意する



4.虫送り祈願の文字も、穂積さんが毎年書いている



5.虫送りの出発前に、工藤順子園長(左)と穂積倉二自治会長のお話がある



6.自分の背丈の3倍以上ある幟旗に「長〜い」と驚きながらも、誇らしげに高く掲げる子どもたち

んの心の中にも悪い虫が入っているかもしれないから、それも一緒に追いかけてみましょう」

話を聞いて大きな声で「はい！」と答える園児たちに、それぞれ名前をついた幟旗を一本ずつ渡した後(写真6)、女の子と男の子が互い違いに一列になり保育園を出発する(写真7)。

〈虫送りの行列〉

中断前の虫ホイ(虫送り)のコースは、集落の西側にある産土神うぶすながみの石亀神社(薬師様)でお神酒あげをした後、男女の藁人形と幟旗を持って出発し、笛、太鼓、手平鉦てびらがねを鳴らしながら集落内をめぐり、東はずれの若宮八幡宮に至るものであった。また、石亀には田子神楽の権現舞の系統を引く石亀神楽が伝承されていたので、かつての虫ホイ行列には獅子頭(権現

様)を奉ずる獅子舞が随行し、集落の家々をお祓はらいしてまわった。昭和40年代までは保存会があり活動していたが、後継者不足のため現在は継承が途絶えてしまったのが惜しまれる。

上郷保育園は集落の東側、人家が途切れる場所にある。このため、門を出るとすぐに両側に田んぼの広がる一本道に出て、まっすぐ若宮八幡宮へ向かう(写真8・9)。本来は大人たちが沿道に出て、子どもたちの行列を見守るのかと思うが、集落内を通らないこともあって住民の姿はなく、地域全体の行事として認知されるまでには至っていないようである。

幟旗の長さは園児たちの身体に余るが、元気を足取りで歩みを進める。行列の先導役の穂積自治会長が手に持つテープリーダーから聴こ

えてくるのは、かつての虫送りで奏されたお囃子である。

〈幟旗を立てる〉

保育園から1キロほどで国道104号を前に鳥居が立つ若宮八幡宮に到着する。ここで穂積自治会長が園児たちが持ち運んできた幟旗をひとつにまとめ、国道を挟んで神社の向かいにある電信柱にくくり付ける(写真11・12)。中断前にはここに男女2体の藁人形も置いた。

田子町内で現在も虫ホイ(虫送り)を行っている飯豊では男女2体の藁人形を一緒に焼いており(以前は男女別々の場所に置いてくるだけで、焼かなかった)、また、細野では男女2体を合体させてから谷底に投げ込んでいる。石亀では焼いたり流したりせずに、そのまま翌年まで放置したものという。

『田子町誌』によれば、かつて田子町の各集落で行われていた虫ホイでは、「2体を合わせて下手に置くところ(下田子)、川上に男、川下に女を流すところ(上相米)、2体合わせて川に流したところ(池振)、壊して火をつけて燃やすところ(夏坂)」などいろいろであったという。行事の内容は大筋では似通っていたが、人形の扱いに関してはそれぞれ違いがあったようである。

幟旗を立て終わると、園児たちは石段を登って若宮八幡宮に参拝し



7.幟旗を掲げて保育園を出発する園児たち



9.正面の山の麓に若宮八幡宮がある



8.穂積さんを先頭に若宮八幡宮へ向けて行進する



11.子どもたちが持ってきた幟旗を、若宮八幡宮前の田んぼ脇に立てる



10.穂積さんが持つテーブルコーダーから囃子が流れる

(写真13・14)、再び田んぼの一本道を通って保育園へ帰る。これで往復約2キロ、約1時間に及んだ虫送り行事は終了となる。

【行事の存続】

石亀の虫送りは、上郷保育園の理解と協力のもと、石亀地区自治会長の穂積倉二さん個人の尽力により復活、存続している面が大きい。ただ、中断前の集落あげての行事と異なり、住民参加が得られていないのが、物足りなくもある。その点について穂積さんは「どこもそうだが、高齢化が進み、若い人がいない。ただ、失くすのは簡単だが、繋げていく努力も



12. 幟旗には、虫を追い払い村境を守る願いが込められている

必要。虫送り本来の姿ではない略式の行事内容だが、形にこだわらず心だけでも伝えていければとの思いで続けている」とおっしゃる。

確かに行事や民俗芸能が一度途絶えてしまうと、それを長い間繋いできた人びとの心も同時に失うことになる。特に未来ある子どもたちにその心を伝えていくのは大きな意味を持っている。

田子町には上郷保育園と田子保育園の2つの保育園があるが、平成25年度に18人だった上郷保育園の園児は、平成26年度に11人に減少するという。上郷地区の高齢化と児童数の減少は今後も進むのは確実で、近い将来、上郷保育園が町の中心地区にある田子保育園に統合されることもありうる。その場合は園児による虫送り行事の存続が危ぶまれることになり、現時点ではそれが最も大きな不安材料となっている。



13. 通称八幡様と呼ばれる若宮八幡宮。虫送りの人形と幟旗は、古くはこの裏山に置くのが習わしであったという



14. 子どもたちが最後に八幡様に手を合わせ、虫送り行事を終える

田子町原の虫ボイ

たっこまちほらむし

【実施地】

三戸郡田子町原字原

【地域の概要】

田子町役場の南西、秋田街道(国道104号)に沿った集落で、西は石亀集落と境をなす。南の熊原川の川向うは飯豊集落である。さらに南は岩手県である。米、葉タバコ、ニンニク、ブドウ、野菜などを生産する戸数40戸の集落である。

【行事の名称】

原の虫ボイ

【行事の由来】

田畑に被害を与える悪虫追いの行事であるが、いつごろから始まったのか、どのような由来があるのか不明である。

【実施の日】

8月4日(日)(以前は、旧暦6月24日。現在は旧暦6月24日に近い日曜日)

【文化財指定】

なし

【行事の主体】

原自治会

【参加者・担い手など】

集落住民の老若男女

【行事の準備】

午後3時ごろより、行列の準備を都市農村交流センター前広場で行う。軽トラック1台(固定する椅子2脚)、幟2本(「伝統芸能虫追い祭り 原自治会」「伝統芸能 原大神楽 原自治会」の文字有り)、太鼓2張、^{はり}笛5本、手平鉦4口、半纏^{はんてん}12枚、豆絞りの手拭12本(写真4)などを準備する。紙旗は、22枚の紙に「悪虫退散 五穀豊穰 四海万福 天下泰平 家内安全」の文字を書き、葉のついた長さ3・5メートルくらいの竹に、一枚ずつ縛りつける(写真2・3)。

【集落内の巡行】

虫追い行事の準備ができると、特別な神事などはなく、都市農村交流センター前の広場から、3時30分ごろ行列が石亀方面に向けて出発した。

半纏を着た案内人を先頭に、「虫追い祭り」や「原大神楽」と書かれた幟を持った2人が並んで進む(写真6)。太鼓叩きは、軽自動車の荷台に固定された太鼓を、椅子に座って叩いている(写真7)。トラックの後方には、笛吹き5人、手平鉦が4人、22本の旗を持つ大人や子どもなど総勢30



1. 原館跡が残る原集落は、国道104号に沿った戸数40戸の集落である

人の行列である(写真5)。太鼓のリズムに合わせて、笛の音色と手平鉦のチャカチャカの音とで、賑やかな行列である。
村はずれのヘアサロン佐藤店宅前で小休憩した虫追い行列参加者は(写真10)、再び太鼓の音で行列を整え、進行する。佐藤店宅前は、現在折り



3.完成した紙旗



2.竹に祈願の文字を書いた紙をとりつける



4.10人以上の半纏と豆絞りの手拭いが用意された



6.「虫追い祭り」の幟と、「原大神楽」の幟が先頭を進行する



5.笛、手平鉦、紙旗持ちの行列



8.風があると、紙旗が揺れて行列に虫が飛んできそうである



7.固定された荷台の太鼓を、2人が椅子に座って叩いている。トラックにも紙旗が1本



9.子ども、若者、老人と参加者は幅広い

1時間が経過している。
 いよいよ最後の虫追い行列が
 出発した(写真16)。太鼓と笛、手
 平鉦が音を奏で、風で紙旗が大
 きく揺れている。その揺れてい
 る紙旗を、女性が行列から離れ、
 道路の下にある自分の畑に刺し
 ていた(写真17)。交流センター
 が近づいてきた(写真19)。広場
 に太鼓を乗せた軽トラックが帰
 り着き、最後の虫送りの太鼓が
 止んだ(写真20)。1時間15分
 の道りであった。

紙旗はそれぞれ、自分の田畑

返し場所となっているが、以前は石亀の境、若宮八幡神社辺りまで行っていた。

行列は、音だけの進行で、とよ唱えことばなどはないが、とても賑やかに見えてくるのが不思議である。

虫追い行列の2度目の休憩場所は、諏訪神社の大きな鳥居があった場所付近である。この場所には、中世の原館跡と標された石標柱(写真14)があり、現在原地区の中心地といえる場所でもある。真夏の太陽が照りつけるほどではないが、暑さは厳しく、自治会では全員にアイスクリームを配り、休憩を取らせていた(写真15)。交流センターを出発してから既に



11.折り返し後、進行する行列



10.村外れでの小休憩。以前は石亀との境まで行ったが、いまは手前で折り返している



13.2回目の休憩場所付近には、諏訪神社の大きな鳥居があった



12.淡々と太鼓に導かれるように進行する

に持ち帰る。交流センターの近くにある畑にも、さっそく紙旗を刺す光景が見られた(写真21・22)。

集落内を一巡してきた参加者たちは、交流センターの和室に集まり、懇親会が盛大に始まった(写真23)。料理の御馳走は、お昼過ぎから女性た

【昔の虫追い】
 ちによって準備された。本場の手作りせんべい汁(写真24)があつた。

村内には町指定の史跡となつている原館跡があり、その付近には現在諏訪神社がある。原館跡の石標柱が国道104号の道路端にあるが、



15.休憩で子どもたちはアイスクリームをもらう



14.2度目の小休憩である



18.畑に紙旗が刺された



16.休憩が終わり、虫追い行列が轆を先頭に集落内を回る



19.交流センターはもう目の前である



17.自分の家の畑に紙旗を刺すため、行列から離れ、畑に向かう



20.広場で最後の太鼓が叩かれる

かつてその辺りに大きな鳥居があつた。以前の虫追い行列は、交流センターではなく、諏訪神社の大きな鳥居から出発していた。麦藁(稈)で虫追い人形を作り、村内を回って石亀集落との境の若宮八幡宮そばに、虫追い人形が安置された。当時は行列に参加する子どもが多く、石亀との境



22.自分の畑に旗を刺す親子



21.交流センター裏手の畑で、子どもが畑に旗を刺している

では両村の虫追い行事が、同日同時刻になるため、大騒ぎになったといわれる。現在は両村とも虫追い人形は、製作していない。

【原の虫追いの特徴】

紙旗を作り、集落を巡って自家の田畑に紙旗を刺しながら進行すると



23.賑やかに懇親会が始まった

ころに、原の虫追いの特徴がある。笛、太鼓、手平鉦などで囃しながらの行列は他村と似ている。

【行事の存続】

行事の開催日が日曜日に変更になったため、若者の参加が目立つ。行事終了後の懇親会には多くの老若男女が集まるなど、住民に理解されている行事である。



25.ナスのニンニク入り味噌煮



24.手作りのせんべい汁

南部町相内の人形まつり

なんぶちょうあいない にんぎょう

【実施地】

三戸郡南部町相内

【地域の概要】

南部町は、三戸郡内の東部に位置し、東は八戸市、北から西にかけて五戸町、三戸町、南は岩手県境に接する。

相内集落は、戸数220戸、南部町役場の南西約8キロの地点にあり、阿房宮(食用菊)、ネギ、サヤエンドウ、カボチャなどの野菜や果樹、米を生産する農村地帯である。なお阿房宮は相内が原産地といわれ、ことのほか生産農家が多い。昭和の初めごろ、麦畑を田んぼに変えている。

【行事の名称】

相内の人形まつり

【行事の由来】

記録はないが、古老たちの話によれば、曾祖父の子どものころにはあったと言われている。とすれば、江戸末期には既にあつたと推定できる。戦前は一時途絶えたが、戦後間もなく復活した。昔は虫送りと言っていたが、現在では人形まつりと言っている。

【実施の月日】

8月16日

【文化財指定】

なし

【行事の主体】

相内町内会で、町内会長を中心に行われる。

【参加者・担い手など】

相内町内会が主体であるが、消防団、防除組合、水利組合、子ども会が協力。

【行事の実施内容】

〈準備〉

町内の大人たちにより、神明宮境内で人形作りを行う。人形の藁わらは、荷台に山積みした軽トラック1台分が必要である。南部せんべいは、お店から購入するが、せんべいを青竹や割りばしに刺しての準備は、各家々で行う。

〈獅子舞・火伏神楽奉納〉

人形作りに取り掛かる前に、獅子舞が神明宮で奉納された(写真2)。昔からの習わしである。この獅子舞は火伏神楽と言われ、人形まつりの行列に帯同し、舞が披露される。獅子頭は寛政5年(1793)の作である。

〈人形作り〉

- ① 人形の芯材となる生木を2体分準備する。胴体や足となる部分は、Y字形に切る。手の部分も必要なので横棒の芯材も切る(写真3)。
- ② 藁人形を作るには、藁のシベ取りが必要であるため、手分けして作業



1. 相内集落



3.藁人形の芯材である生木を切る



2.神明宮で藁人形作りの前に獅子舞を奉納



5.人形は生木を芯材にして、芯材に藁を巻いて作る。足に藁を取りつけている。横の棒は手となる



4.藁のシベ取りは、手分けして行う



6.芯材に藁を巻きつけて胴体、足とする。手前の木は頭になる藁をとりつけるところ。左右の木は手となる



7.胴体、足を作りながら、手と頭へと作業が進む

をする(写真4)。昔は麦稈むぎからでの人形作りであった。

③ ①で作ったY字形の芯材の、まず足の部分に藁を巻きつける(写真5)。胴体部分にも藁を巻きつける。芯材の木が中心になるように気をつけ、藁を縛っては太くして巻きつける。胴体と足にはさらに藁を補充し

ていく(写真6)。

④ 手となる軸棒を横に取りつけておく(写真5)。

⑤ 足には足首が必要なため、軸の木は足首までとし、足の甲は曲がらないようにしておく。

⑥ 手となる部分にも、藁を巻いていく(写真7)。

⑦ 藁人形は人間の身長より高いため、5、6人がかりで作業を進める(写真8)。

⑧ 男の頭部は藁を少し長く巻く。顔とちよんまげ丁髷にする(写真9)。

⑨ 女の人形も男と同様に作るが、頭は丁髷ではなく、顔の部分を開けた藁帽子風の被り物とする(写真10)。

⑩ 藁人形の手足の指は、一本、一本丁寧に藁を縛り、それらしく仕上げ(写真11)。

⑪ 藁人形の形が整ったら、人形を起し、担ぎ棒を人形の左右にしっかりと



8.藁の巻きつけは、太くするため人手が必要である



9.男の藁人形の頭は丁髷とする



10.女の藁人形の頭には、藁帽子風の物を被せる



11.指は一本一本丁寧に作られる



12.藁人形を担ぐ棒は、しっかりと固定する



13.男性の象徴は、キュウリとジャガイモで作る

と縛り、取りつける(写真12)。

⑫ 男性の象徴である男根は、キュウリとジャガイモで作る(写真13)。

⑬ 女性は胸の膨らみを強調するため、カボチャをおっぱいにし、カボチャの膨らみを緑のネットで覆う(写真14・15)。ここまでできると藁人形の完成である。

〈藁人形完成後〉

藁人形の完成を見越して、境内に子どもたちや父兄が南部せんべいを持って、集まってきた(写真16)。自分の体で悪いところがあれば、南部せんべいでさすり、そのせんべいを竹や割りばしに刺して、藁人形に悪いものを持って行ってもらうというのである。

藁人形の前を行進する紙旗は、竹に取りつけられ準備ができています。この紙旗に書かれた文字は、「悪虫退治」2枚、「五穀豊穰」2枚、「無病息災」2枚、「天下泰平」2枚、「家内安全」1枚、「交通安全」1枚の計10枚で

獅子舞が終わると、いよいよ藁人形の行列が動き出す。紙旗を持つ子どもたちを先頭に(写真22)、藁人形、獅子頭を持つ舞人、笛の4人、手平鉦てびらがねの4人、台車に乗せられた2つの太鼓を叩く人、ほかに父兄、関係者など総勢40人ほどである(写真23・24)。

〈集落内の巡行〉

獅子舞が終わると、いよいよ藁人形の行列が動き出す。紙旗を持つ子どもたちを先頭に(写真22)、藁人形、獅子頭を持つ舞人、笛の4人、手平鉦の4人、台車に乗せられた2つの太鼓を叩く人、ほかに父兄、関係者など総勢40人ほどである(写真23・24)。

男女2体の藁人形は、神明宮の拝殿前に安置された。拝殿を背に、右に男、左に女の藁人形が獅子頭とともに並んだ(写真19)。

〈出発前の儀式〉

ある(写真17)。笛の練習もすでに境内で始まっている(写真18)。



14.胸の膨らみはカボチャで作る



15.胸の膨らみのカボチャは、緑のネットで覆う



16.完成した藁人形にせんべいを刺す親子

揃いの阿房宮(食用菊)の菊花を染めた法被はっぴを着た人たちの笛、太鼓、手平鉦などを奏でる音に誘われ、南部せんべいを持つ人々が道路に出てきて、藁人形に自分の体の悪い部分をなでたせんべいを刺し、拝んでいる(写真25・26)。

揃いの阿房宮(食用菊)の菊花を染めた法被はっぴを着た人たちの笛、太鼓、手平鉦などを奏でる音に誘われ、南部せんべいを持つ人々が道路に出てきて、藁人形に自分の体の悪い部分をなでたせんべいを刺し、拝んでいる(写真25・26)。

「ダダダコダندان」の太鼓の音

や笛、鉦で賑やかな行列は集落内を周回するように進み、相内町内会館前広場で休憩となった。休憩後、藁人形の前で獅子舞が披露された(写真27)。

周辺の人もたちもせんべいを持ちながら家から出てきたため、ことのほか賑やかである。舞が途中止むと「相内神明 皇大神宮 ご祈祷家



18.笛の練習は、神社の境内で本番前に行う



17.竹につけられた「悪虫退治」などと書かれた紙旗

内安全 交通安全 火伏ご祈祷」の唱えことばがあり、再び獅子舞が舞われた。

休憩を終えたら、最後の行進である(写真29・30)。村はずれには畑が多く、坂道を上り、果樹園の中の一本道を通り(写真31)、やがて熊野神社前の広場に到着した。

〈藁人形を焼く〉

広場に到着した藁人形は、広場の中央に運ばれる。今まで担いできた担ぎ棒が外され(写真32)、やがて男女2体の人形は足を開き、顔と顔を互いの肩にうずめるように抱き合わされる(写真33)。2体の藁人形の周りには、子どもたちが持つてきた紙旗も、立てかけられた(写真34)。

藁人形の前では、御幣と鈴を持った獅子舞が舞われる。「相内神明皇大神宮おあとご祈祷 御後は 家内安全 交通安全 火伏ご祈祷 悪魔払いか」と唱えことばが入る。これから焼かれようとしている藁人形に、集落内から集められた悪虫、悪病、禍などを託すのである(写真35)。

やがて、舞が終わる藁人形の足に火が付けた(写真36)。炎は胴体へと移り、真つ赤な炎が紙旗やせんべいなどを徐々に焼いていく。人々の災いのすべてを焼き尽くすのである(写真37・38)。

【相内人形まつりの特徴】

相内の人形まつりには、他村の虫送りと大きく違う特徴がある。送り出すのは虫であり、悪虫退治であるが、害虫ばかりではなく、自分の体の悪い部分をさすった南部せんべいを、割りばしや青竹に挟み、人形に刺しこんで行進し、最後に焼却する点にある。その点は同じ南部町正寿寺の人形まつり(本書64ページ)と類似している。



20.いよいよ人形まつりの開始である



19.人形の顔には、男女の似顔絵を描いた、紙をつける。男根は白紙を被せ、見えなくする。完成した藁人形を前に、一休みである



22.神社から紙旗を持つ子どもたちを先頭に、行列が出発する



21.出発前に獅子舞が披露された。火伏神楽である



23.藁人形は男手により担がれる



24.集落内を進む行列



26.せんべいを刺し、人形に手を合わせる女性



25.さっそく待ちわびた人たちが、せんべいをもって道路に出てきて藁人形に刺す



28.笛、手平鉦、太鼓などの囃子方



27.相内町内会館前で獅子舞が披露された

【行事の存続】

相内集落は、戦前から戦後にかけて、120戸の戸数で推移してきたが、その後戸数が増え、220戸の現在に至っている。従って、昔は現在のおよそ半数の戸数で行事が行われていたといえる。

現在、行事に協力している団体に、集落内の防除組合、農業組合、水利組合、消防団、子ども会などがある。今年も各団体の協力があり、参加者の年齢構成も幅広く、今後も行事は存続はするものと思われる。



30.村はずれの坂道の周囲は、畑が多い



29.集落の外れまでくると、藁人形に刺し込まれたせんべいかなり増えていた



32.広場で担ぎ棒が外される



31.道路の両脇は果樹園。間もなく熊野神社である



34.子どもたちが藁人形の前に紙旗を立てかける



33.男女の藁人形は、合体させられる



36.男女の藁人形に火が付けられた



35.藁人形が立てられた前で、火伏神楽が最後のご祈禱をする



37. 炎がすべての災いを燃やしてくれる



38. 災いは焼き尽くされ、炎も小さくなっていく

八戸市島守の虫追い

はちのへししまもり

むしお

【実施地】

八戸市南郷区島守門前(島守第6区)

【地域の概要】

調査地の島守地区は八戸市南部の南郷区にある。南郷区は東を階上町、西を南部町、南を岩手県軽米町に接し、平成17年、八戸市へ編入するまでは三戸郡南郷村であった。

島守地区は四方を山に囲まれた小盆地に集落が点在する独特の景観をなしている。平家の落人が逃れて、平家の落里との伝説が残る(写真1)。盆地の中央部を北流する新井田川の流域に水田が広がり、稲作、畑作ともに盛んな土地である。

盆地内の集落は、いくつかがまとまって



1.鷹巣展望台から望む島守盆地。島守第6区は盆地の南西部にあり、区内の3集落を合わせて80戸を数える

12の区(自治会)に分かれており、この中で虫送り行事が行われているのが、上門前、下門前、高山の3集落からなる第6区である。区内に日本三大虚空蔵のひとつといわれる龍興山神社や、平清盛の子、平重盛が建立したと伝わる高松寺があり、それが門前の地名由来となっている。

【行事の名称】

虫追いまつり。行事が中断する前(戦前)は「虫祭り」と呼んだ。

【行事の由来伝承】

虫祭り(虫追い)は、島守第6区で古くから行われていた年中行事であったが、終戦直後の混乱で途絶えたままになっていた。人びとの記憶から忘れ去られようとしていたこの行事を、6区の自治会有志が中心となって、平成10年に始まった夏祭りに合わせ、地区の行事として後世に伝えていこうと復活したものである。

戦前は島守地区のほとんどの集落で虫送りが行われていた。新井田川の上流から下流に向けて順繰りに虫を送ったというが、島守12区のうち虫送り行事を復活させたのは第6区だけである。

【実施の日付】

6月第3日曜日(中断前は旧暦6月24日)。この日は第6区のお祭り「ふれあいデー」で、虫追いまつりは、その一環として実施される。

【文化財指定】

なし

【行事の主体】

第六区虫追いまつり保存会(平建作会長)。6区内の3集落(上門前、下門前、高山)の集落会長と役員が中心となり、約20名で構成されている。

【参加者・担い手など】

虫追いまつり保存会のメンバーのほか、地区の消防団（南郷区第4分団第3部消防団）、太鼓、笛、手平鉦てびらがねの奏者、幟旗のぼりばたを持つ子どもたちとその保護者らが行列に加わる。3集落の女性部（婦人会）は行事終了後の慰労会（「ふれあいデー」）における飲食の用意を担う。

【行事の実施内容】

〈準備〉

南部地方の虫送りは、人形を形代かたしろとして送るところ、ノボリ・ハタのみを送るところ、両方を用いて送り出すところの3つの形態に分かれるが、島守地区では昔から幟旗のみを用いて虫祭り（虫追い）を行い、人形を作る集落はなかった。復活してからも人形を作らないため、当日になって特に準備に時間を割くことはない。白い紙に祈願の文句を「悪虫退散 五穀豊穰」とだけ大きく墨書きし（写真2）、これを竹竿に取りつけた幟旗を20本ほど用意するだけである。

〈雨龍権現への参拝〉

島守第6区の虫追いまつりでもっとも特徴的なのは、行列の一行が



2. 害虫駆除と穀物の実りを願う

龍神の大きな模型をかつきながら練り歩くことである。同じ青森県の津軽地方では、虫送りに龍や蛇体をデフォルメした形代を用いるが、第6区の龍はこれ



3. 龍神を祀る雨龍権現。島守四十八社のひとつでもある

とはまったく関連がなく、また、伝統的な虫送り儀礼をふまえたわけでもない。なぜ虫追いまつりに龍が登場するのだろうか。

保存会会長の平建作さんによれば、虫追いを復活したものの幟旗だけだと何となく物足りないもので、みなで意見を出し合い、龍神を作ることにした。その理由は、地区の南はずれの新井田川の川岸に鎮座する雨龍権現にある（写真3）。雨乞いの神として地区住民の信仰を集め親しまれてきたその龍神様を、虫追いまつりの主役に据えることにしたのだという。そのため、虫追いの行列が出発する前に保存会の役員が雨龍権現まで行き、龍神を祀った祠ほくらに参拝し、お囃子を奉納してお神酒上げするのが習わしとなっている。

平成24年から行事に用いている龍神は4代目で、初代は地域の拠点施設、朝もやの館総合情報館に展示し（写真4）、3代目、4代目は地区の集会所、第6区集落センターに保管してある（写真5）。いずれも、長さ



4. 最初に製作された龍神のレプリカ（朝もやの館総合情報館）

3・5メートルほどで、3代目と4代目は保存会役員の手づくりである。
 〈地区内の巡行〉

午後1時30分、上門前集落にある第6区集落センターから虫追い行列
 が出発する。先頭は島守第6区自治会の団旗で、次に「第六区虫追いまつ
 り」と書いた^{のぼり}幟、その後ろに竹竿の幟旗と龍神、お囃子が続く(写真6)。

龍神は大人4人から5人で担ぎ、上下に動かし道をジグザグに進みな
 がら氣勢をあげる(写真7・10)。お囃子は太鼓3基、笛6丁、手平鉦5口の
 大変賑やかなものである(写真8・9)。中断前の囃子を覚えている人は
 ほとんどいなかったため、保存会の世話役の高長根越右工門さんに太



5. 第4代目の龍神。保存会会長の平健作さんと世話役の門前廣美さんが、100円ショップから材料を買い求め、数週間かけてつくりあげた(「第6区集落センター」)

鼓の叩き方を、島守地区の荒
 谷集落に伝わる「荒谷えんぶ
 り」(国指定重要無形民俗文化
 財)のメンバーから笛の節と吹
 き方を教えてもらった。笛を
 吹くのは、覚えが早くて上手
 な女子高生や若いお母さんが
 多く、行事の盛り上げに一役
 かっている。

法^{はっぴ}被を身に着けた総勢30人
 ほどの一行は、はじめ集落セ
 ンターのある上門前、下門前
 の集落内を通る。この時、道端
 に出て行列を見送る住民から



7. 道中では、花火を龍神の口の中に入れて火を噴かせるパフォーマンスも(平成18年撮影)



6. 後方の集落が上門前、下門前。三角形の山は平家の落人伝説が残る龍興山(平成18年撮影)



9. 子どもたちも手平鉦でまつりを盛り上げる(平成21年撮影)



8. 太鼓の大きな音は、害虫や悪霊を追い払う(平成18年撮影)



10.各地の龍神祭りで見られる蛇踊りのように、上下左右に動かしながら進む(平成18年撮影)



11.島守盆地の田園地帯を行く第6区虫追いの行列(平成18年撮影)

ご祝儀が出る。南から北へ向きを変え、集落内から島守盆地の中央部に広がる田園地帯を進む(写真11)。行進の間に特別な唱えことばを述べることや、田んぼの畦くもなどに幟旗を立てることはしない。ただ、南部地方における虫送り行事では、田畑に幟旗を押し立て、虫を追うための何らかの唱えことばを大声で言ったり、叫んだりするところが多かった。戦前の虫祭りではどうであったろうか。

南郷歴史民俗資料館や南郷区島守支所を右に見て、県道の交差点に建つ北田土地改良区の区画整理記念碑前に到着すると、持ってきた幟旗のうち5〜6本に火をつけ焼く(写真12)。残りはこの場に立て置くことはせず、持ち帰る。途中数回の休憩をはさんで約1時間、約2・5キロの道のりの虫追いは、ここで終了となる。

虫追いの参加者はいったん集落センターに戻り、龍神や楽器などを納める。この日は、朝もやの館総合情報館に隣接したふれあい公園で、第6

区のお祭り「ふれあいデー」が行われている。参加者も公園に場所を移し、慰労会をかねて演芸やバーベキューなどを楽しむ。

【行事の存続】

中断していた虫祭り(虫追い)行事が復活してから平成25年で15年を迎えた。復活に際し、雨乞いの神である龍神を虫追いの主役に据えるというアイデアや、お囃子もほかの集落から教えを乞うなどしたことが、新しい地区の行事として定着する要素ともなった。虫追いまつり保存会を立ち上げ、行事の存続に積極的に取り組んでいる点も評価される。

不安材料としては、保存会の役員が60代〜70代で、その後が続く若い住民がいけないことや、お囃子の笛を吹く高校生が、卒業すると地区を出て戻ってこないことなどがあげられる。

ただ、こうした伝統行事の継続に関する悩みは他地域も同様である。島守第6区は3集落の結束が固く保存会も組織として機能しているため、当分は行事の存続に問題はないように思われる。

(本項の写真6〜12は「第6区虫追いまつり保存会」の提供による)



12.最後に区画整理記念碑前で幟旗を焼き、害虫の駆逐と豊作を祈念する

五戸町豊間内の虫送り

ごのへまちとよまなひ むしおく

【実施地】

三戸郡五戸町豊間内、志戸岸

【地域の概要】

五戸町は三戸郡の内陸北部に位置し、東は八戸市、西は新郷村、南は南部町、北は十和田市に接する。奥羽山脈の東に発達した緩やかな丘陵地からなり、総面積の半分以上を森林が占める。平成16年7月1日、倉石村を編入し新しい五戸町となった。

調査地の豊間内地区は、町の東南部、浅水川に沿って開けた沖積地に集落が形成されている。川と並行して国道454号が走り、道路沿いに志戸岸(戸数110戸)、豊間内(120戸)、岩ノ脇(30戸)の3つの集落が並ぶ。

農業従事者は兼業農家が主で、もとは稲作を中心にリンゴ栽培が盛んだったが、現在は長芋、ゴボウ、ピーマンなどの野菜づくりが主体となっている。JR八戸駅まで15分の距離にあるため、八戸市街地への通勤者が多い。

【行事の名称】

豊間内地区虫送りまつり

【行事の由来伝承】

虫送りがいつごろから行われるようになったか、記録がないのはつきりしないが、豊間内地区では、戦前まで地区内の3集落(志戸岸、豊間内、

岩ノ脇)ごとに実施されていたことは確かである。

そのころの虫送りのやり方は、初めに、豊間内地区よりさらに上流部の集落から虫追いの集団が笛・太鼓で大きな音を出しながらやってくる。岩ノ脇集落では村境でそれを引き継いで下流部の豊間内へと虫を追って行く。豊間内から次は志戸岸へ引き継ぐ。さらに下流部の集落へ……といったように、順繰りに虫を遠くへ送ったものという。その後、戦後になってからは志戸岸だけが継続していたが、それも昭和30年代初めには行われなくなった。

途絶えていた豊間内地区の虫送り行事だったが、平成3年、旧自治省のコミュニティ活動活性化地区に指定されたのをきっかけとして結成された「豊間内地区コミュニティ実行委員会」が、地域づくりの一環として、3集落をめぐる合同行事に編成し直して復活させた。以来、地区の年中行事として定着し、平成25年で23回目を迎えている。

【実施の月日】

7月第3日曜日。中断する前は旧暦6月24日

【文化財指定】

なし

【行事の主体】

豊間内地区コミュニティ実行委員会(佐々木一栄^{かずさき}会長)の主催。会は志戸岸、豊間内、岩ノ脇の3集落の自治会が結集して組織されたもので、「ふるさといままつり」のようなイベントから花の植栽などの美化運動まで、住民主体の活動による地域活性化の取り組みが、各方面から注目を集め評価されている。虫送りだけでなく、郷土芸能の駒踊りも、かつて



1.佐々木一栄さん(豊間内地区コミュニティ実行委員会会長・豊間内自治会会長)



2.小泉隼人さん(志戸岸自治会会長)

踊っていた地域の人たちの手ほどきで復活させ、小学生に継承している。

当初から豊間内地区3集落の合同行事として実施してきたが、岩ノ脇の過疎化が進み参加者確保が難しくなったため、平成20年ころから実質的には志戸岸自治会(小泉隼人会長)と豊間内自治会(佐々木一栄会長)が行事を担い、岩ノ脇自治会は行事の運営から退いている。

【参加者・担い手など】

各集落の消防団員、老人クラブ、豊間内小学校の児童とその保護者、若者連中などが参加し、多い時は総勢100人ほどになる。1世帯から1人の参加を呼びかけている。ただし、岩ノ脇は行事に直接関わらなくなったため、オープン参加としている。

【行事の実施内容】

〈準備〉

祭りの参加者は午前8時30分に豊間内地区コミュニティセンター前に集合する。ここで幟のぼりを参加者に渡す。豊間内では幟を「はた」ともいう。

以前は和紙に「天下泰平 国家安全 五穀豊穰 悪虫退散祭」と墨書きした紙の幟だったが、今は布に同様の文字を印刷したものを使っている(写真4)。破れたりしないので、行事が終わると保管しておき、翌年の祭りで再利用する。ただ、竹は毎年新しいものを30〜40本揃える。先端の葉を残した細竹で、復活したころは竹の先を花で飾ることもあったが、最近はやらなくなった。

地区内をまわるときに必要な道具類は幟のほか、お囃子の太鼓1基、笛6丁〜8丁、手平鉦てびらがね2口。あとは太鼓を乗せて引くりヤカー。豊間内の虫送りでは藁人形わらこのようなものを作らないので、大変シンプルな行列となる。

中断前の虫送りを知る志戸岸自治会長の小泉隼人さんによれば、少なくとも戦後の志戸岸では人形を見たことはなく、戦前の虫送りでも作ったという話を聞いたことはないという。

幟の文字を書いたり、人形を作ったりしないので、当日朝は準備に時間を割かなくてもよい。すぐに行事が始まる。コミュニティセンターから豊間内の産土神うぶすながみである熊野山神社へ移動し、自治会役員、氏子総代、消防団員が拜殿内で拝礼する。神主などによる神事は特に行わない。境内で豊間内小学校の鼓笛隊が演奏を奉納した後(写真3)、行列をつくって9時30分ころ出発となる。

〈地区内巡行〉

岩ノ脇自治会が行事に参加していた時は、岩ノ脇天満宮から出発し、



3. 出発前に熊野山神社境内で演奏する豊間内小学校の鼓笛隊(豊間内小学校提供)

豊間内熊野山神社から志戸岸天満宮にそれぞれ参拝し、コミュニケーションセンターへ戻るコースだった。現在は熊野神社から国道454号バイパスに出てから、浅水川沿いに圃場整備が終わって区画整理された田んぼのあぜ道を抜け、志戸岸集落へと向かう(写真5・7)。

道中で奏でる囃子は、戦前のものを継承している住民がいなかったこともあり、五戸地区の南部駒踊りの師匠から新たに教わった。そのため中断前のものとは異なっている。ただ、かつては豊間内地区からも「えんぶり組」を出しており、その時に使っていた楽器をそのまま虫送りの囃子用にすることができたのでよかった。笛の吹き手は特に決まっているわけではなく、希望者なら誰でもなれる。今は吹き方を教わって覚えた若いお母さんが多い(写真6)。

巡行の途中では、掛け声や唱えごとを発することはないが、それぞれ心の中で悪い虫を追い払い、五穀豊穡を願う。また、幟やお札を田畑の畦に立てることはせず、最後に焼いたり川に流すこともしない。

志戸岸の天満宮に到着すると、社務所前の広場で鼓笛隊が熊野神社に続いて演奏を奉納する。しばし休憩のあと旧国道を通過して、豊間内のコミュニケーションセンターに戻る。最後に子どもたちに自治会長や校長先生から虫送り行事のルーツや意義について話があり、全行程約3キロの道の



5. 豊間内小学校の鼓笛隊の児童を先頭に練り歩く虫送りの行列(平成22年撮影・五戸町役場企画振興課提供)



4. 布製の幟(平成22年撮影・五戸町役場企画振興課提供)



6. 虫を追い払う囃子の音が田圃に鳴り響く(平成22年撮影・五戸町役場企画振興課提供)



7.豊間内の水田地帯に五穀豊穡を願う幟がはためく(平成22年撮影・五戸町役場企画振興課提供)

りを約2時間かけて練り歩いた行事は終了となる。

続いてコミュニティセンターで、子どもたちにせんべい汁が、大人たちには酒食が供されて慰労会が催される。

【行事の存続】

豊間内地区3集落のうち、岩ノ脇は人口の減少で自治会の参加を取りやめているが、志戸岸と豊間内は合わせて200を超える世帯数があるので、参加人数的には問題がない。ただ、地区の要ともいべき豊間内小学校が平成26年春に閉校となつてしまい、子どもたちの行事への参加が危ぶまれるのが不安材料である。実行委員会では、鼓笛隊が継続して行事に参加できるよう、学校に協力を取り付け了解を得ているという。

南部地方で中断していた虫送りを復活した地域はほかにもいくつかあるが、再び中止を余儀なくされているところも多い。その点、豊間内の虫送りは、主催者である豊間内地区コミュニティ実行委員会が、結成23年を迎えた現在も活発な活動を展開しており、地区民の郷土愛も強いので、行事の継続に関しては当面心配ないように思われる。



8.豊間内小学校鼓笛隊。閉校後も行事参加が望まれる(豊間内小学校提供)

青森県南部地方で伝承が途絶えた主な虫送り

※各町村史に記載されている虫送り行事を抽出し、表とした
 ※行事の消滅の時期については不明な点が多く、資料不十分のものは空欄とした

町村名		地区名	消滅の時期	名称	実施時期	行事内容
野辺地町		有戸		ムシポリ	6月15日	お宮に集まり札を貰い、各自の畑にそれを立てた。
野辺地町		明前		ムシポリ	6月か7月ごろ	各家がワラで人形を作り、腹にそば餅を入れ、境に立てて来た。
野辺地町		馬門	大正時代半ばごろ消滅	虫送り	田植えが終了した後の、病送りとほぼ同じ時期	半紙に「虫」と書いた旗を持ち、太鼓を先頭にして、「ナニムシボウル、イモムシボウル」「ナニムシマツロ、ゴザラムシマツロ」などと唄いながら、田畑を走り回り、田畑につく害虫を払い、豊作を祈願した。
野辺地町		新田	戦後消滅	虫送り	6月15日	半紙に筆で虫の絵を描いて、竹に付けて、畑の所々に刺して虫よけや害虫払いをして、その年の豊作を祈願した。
野辺地町		中屋敷	戦後消滅	虫送り	6月15日	半紙に筆で虫の絵を描いて、竹に付けて、畑の所々に刺して虫よけや害虫払いをして、その年の豊作を祈願した。
野辺地町		不明		虫ポリ	5月	テンガラ(蝶)やゲンダガ(毛虫)・ホタルムシ(黄金虫)・ヨメコムシ(てんとう虫だまし)などの絵を描いた紙の幟を立てて村はずれまで送った。
野辺地町		倉岡		不明	4月16日 (お蒼前様の日)	半紙に虫の絵を描いて、竹に貼り付けるか、割って挟むかした旗を持ち、ケンバイ踊りの拍子を奏しながら村の出口と入口に送った。唄えことは特に無かった。田は廻らなかつた。
野辺地町		不明		虫追い	不明	昭和36年12月10日の上北新聞「其の模様はまず、多くの人々手に手に紙旗に多くの虫を置き、又は悪虫駆除云々の文字を記したるを携え、太鼓をたたき鉦をならし法螺を吹きて道を練り歩き、己の畑の処に至れば、持てる旗を一畑に一個ずつ立てて廻り、終われば産土神社内において一大酒宴を催して楽しむなり」と述べている。
七戸町		町内全域		虫ポリ	6月24日	紙の幟を立てて、笛・太鼓・手平鉦などの囃子で村の辻に送るものと、男女一対の藁人形を作って送るものと二系統あるが、六戸町の場合、どの集落でも前者である。 田畑の作物に被害を及ぼす害虫(毛虫やホタル虫、コガネ虫)を半紙に描き、細竹の先に張り付けたり、割って挟んだりして、子どもたちがそれぞれのおボシナサマ(産土さま)から村外れまで送った。いわゆる悪虫駆除の行事で、このノポリを自分の畑に立てることもある。書く人は、大体その地区の寺の和尚か、書道の達人に書いてもらったが、その集落によって書き方は若干違っていた。概ね、害虫の絵のほかに「天下泰平 国家安全 五穀成就 村中無事 家内安穩 害虫悉皆退散拂」と文字を書き、「何の虫ボルや、稲の虫ボルやとんがら虫のとんがらでつぶけたらまいらせろ やあやあ」と声高らかに唄えながら歩いた。
六戸町		上吉田		虫ポリ	不明	「ほたる虫ツコ いやな ホイホイ」と唄え、法螺貝も用意して吹いて歩いた。
六戸町		岡沼・沖山		虫ポリ	不明	「ほたる虫ツコ いやな ホイホイ」と唄え、法螺貝も用意して吹いて歩いた。
六戸町		岡沼		虫ポリ	不明	「菜の虫ぼれ 畑虫ぼれ ヤッホー ヤッホー」と唄え、行列を作って「木の塚」(現在の昭陽小学校向かい)に行き、若者たちが酒盛りを始めた。その時、よく酔ったの喧嘩が起ったという。
六戸町		沖山		虫ポリ	不明	白山大権現堂の根元で酒宴を催した。
六戸町		上町・高館		虫ポリ	不明	半紙を虫の形に切り取って、つけ流しにして歩いた。
六戸町		金矢	明治30年ごろが盛んであった	虫ポリ	不明	「テノリ」の日に虫ポリを行っており、この日、「ベゴ突きあい」(鬮牛)も催され、勝てば酒がもらえた。
六戸町		米沢		虫ポリ	不明	田んぼをまわりながら、「他の村さ飛んでげえ 飛んでげえ」と唄えた

旧南部町 (現南部町)				旧百石町 (現おいらせ町)	旧下田町 (現おいらせ町)				
大向	門前	小向	玉掛	町内全域	木ノ下	三本木	耳取	染谷・木崎	阿光坊
虫ぼい	虫ぼい	虫ぼい	虫ぼい	虫ぼい	ムシボリ	ムシボリ	むしぼい	むしぼい	ムシボリ
旧6月24日	旧6月24日	旧6月24日	旧6月24日	6月24日	6月24日	6月25日	6月24日	6月24日	6月24日
<p>「天下泰平 国家安全、五穀成就 村中無事 家内安穩 害虫悉皆退散拂」の文字を、半紙たて半分切りを10枚つないだ旗に書いたものを、5メートル余の長い竹につけておし立て、「ナニボシ ポレヤ(何虫追れや)、トヨ虫(土用虫) ポレヤ、ナーヤ、ヤー、ヤヤ」と唄い、太鼓をたたいて歩く。川まで追い、下は金淵、上は新敷のマガト(曲所)まで追って行った。川岸で、みんなの持っている旗をみな寄せて、あらかじめ準備してある2メートルほどの竹でからむ。そしてカナ森(観音森)の崖の上から旗の竹を折って川へ投げ込む。中にはこれを折らないで自分の畑に持って行って立てる人もあった。太鼓は一つだけである。</p> <p>産土神の稲荷神社に集まって大人はオミキアゲをし、子どもたちはムシボイをする。半紙半分を5枚くらいつないだ旗をこしらえ、「天下泰平 国家安全、五穀成就 村中無事 家内安穩 虫祭悉皆退散事」と書き、その上部に水引二つ引きを書く。これを自分の家の田畑にさして立てる。子どもたちはまた、フエ・カネ・タイコにも吹きながら畑を廻って歩き、最後に川端へ行つて、旗の竿を折って流す。これは子どもたちばかりでやる。染谷にはもと獅子舞があったので法螺貝も吹いたし、また鳴物は上手でなくてもよいので、大人は参加しなかったという。</p> <p>産土神の耳取大権現でオミキアゲをし、子どもたちに旗を書いてくれた。半紙半分に切つて長くつないだものに「天下泰平 国家安全、五穀成就 悪虫追拂」と書く。子どもたちは田畑に出て、めいめいの家の田畑にそれを立ててくる。鳴り物などは別に用いない。戻つて来れば菓子をわけてやる。</p> <p>オボシナ様(天神様)の御縁日に一緒にやった。旗を立て、太鼓を叩いて歩き、フエも用いない。「何虫ぼいるア、土用虫ぼるアね、ヤー、ヤー、ヤー」と唄え言をしながら歩く。半紙をつないでこしらえた旗に「天下泰平 国家安全、五穀成就 村中無事 家内安穩 悪虫悉皆退散拂」と書く。これにササギ畑に行つて取つてきた葉っぱに墨をぬつて押しつけ、さらに土用虫や毛虫の絵を自分の手で描く。これを竹にむすんで、天神様から上つ端の方へ行き、それから下にさがり、耕地のある所にかかと太鼓をたたき、歌をうたつて歩く。旗は歩いていっているうちに、だんだん引つ切れてくる。竹だけになると、地面をたたき、巡り終われば川端に行き、竹を折って流してやる。</p> <p>紙に毛虫・イモ虫などを書き、これをムシと言ひ、子どもたちがムシを持って、笛・太鼓で歩いた。「虫まつ(虫祭)そうろう、虫のまつ候、何の虫も来ないように、海の端まで飛んで行け」と言ひながら村外れまで行き、そこへ全部捨てて三回まわつてくる。また、畑の入口などにも捨てる。まわり終わつて帰ればみんなオミキアゲをした。ここでも、下田本村でも早くから取り止めたらしく、むかしやつたというが見たことがないと言ひ人が多い。</p> <p>薬剤散布防除もできなかった昔は、病虫害はいかんともしがたい自然の強敵であった。従つて神に祈つて病虫害を退散してもらうより方法が無かつた。「天下泰平 五穀成就 悪虫退散 家内安全」と書いた紙のぼりを自分の田畑に立てる風習であった。一方、村中集まつて紙のぼりを立て、笛・手びらがね・太鼓で首頭をとり、産土神に願をかけ、村境まで行つて解散する。この日は、素麺か手作りうどんを煮て食べる。神にはお神酒、米のシトギを供え、農作物が立派に収穫できるように祈る。また、この行事に参加しなかつた家の畑には、虫が集まると信じられていた。</p> <p>「悪虫払い」ののぼりを立てて笛・太鼓ではやしながら田圃をまわり、のぼりは辰ノ口付近に捨てた。人形は作らない。のぼりの先にカラオイの花をつけたりリンキンの実をつけたりした。</p> <p>ワラ人形を一体作り、のぼりを立てて村外れに行つて捨てた。</p> <p>「子どもたちは手頃の竹にカラオイの花をつけて「天下泰平 国家安全 五穀成就 悪虫退散」と書いた旗をつき、元八幡さまに行き、そこから笛・太鼓・手平鉦で出発する。農道を廻り、上は泉山道まで行き、戻りは下の古牧橋まで来て、橋の上から「悪虫退散の旗」を川に流した。八幡さまに戻り、子どもたちにはセンベイを呉れ、大人たちはそれより御神酒を呑む。この日は農家は休み」 「天向地区年中行事」より</p>									

東北町						六ヶ所村			東通村			三戸町			旧名川町 (現南部町)	町村名	地区名	消滅の時期	名称	実施時期	行事内容	
狼ノ沢	蓼内	外姥沢	田ノ沢	長者久保	淋代	下清水目	上清水目	上板橋	町内全域	下田代	白糠	鹿橋	日時	大舌の大羽沢	袴田・蛇沼・泉山・梅内・斗内	町内全域			むしまつり (虫追い)	6月24日	半紙を縦に半分切ったものを、縦に数枚つなぎ合わせて旗にし、それを長い竹に付けておしたて、何虫追る、土用虫追る」と叫びながら、子どもたちも一緒に集落の田圃や畑の中をまわって歩く。旗には「天下泰平、国家安全、五穀豊穡、悪虫退散虫祭」といった文字を書いている。この日はこれと一緒に男女一対のムギカラ人形を作る。大きさは普通は等身大くらいのもので、それを担いで田畑を巡り歩く。笛・太鼓・手平鉦で歩くところもある。そして村境の適当な場所に立てかけて置く。これを「人形ほい」といっている。人形はその場で焼くところもあれば、川へ流すところもある。虫ほい、人形ほいは集落によって日は一定していない。また集落によって虫ほいだけで、人形ほいはやらないところもある。	
ヤマヨケ	虫ボリ	虫ボリ	虫ボリ	虫ボリ	虫ボリ	虫ボリ	虫ボリ	虫ボリ	虫ボリ	不明	不明	不明	虫ほい	虫ほい	虫ほい	虫ほい	虫ほい	不明	不明	不明	不明	6月の虫ボリ(虫送り)は、畑の作物も成長してきているので、村の若者組が笛・太鼓ではやしをつけながら畑をまわって害虫を追った。平沼では、別当さまの家でつくった虫追い札をつけて田畑を巡って虫ボリをした。半紙を長く切って書き、カヤにはさんで立てて歩いた。
																					6月の虫ボリ(虫送り)は、畑の作物も成長してきているので、村の若者組が笛・太鼓ではやしをつけながら畑をまわって害虫を追った。平沼では、別当さまの家でつくった虫追い札をつけて田畑を巡って虫ボリをした。半紙を長く切って書き、カヤにはさんで立てて歩いた。	
																					害虫を駆除する目的で、虫ボリを行った。その際、「いも虫ホイホイ、ホイホイ」と唱えながら村はずれまで虫を追った。長竹に半紙を挟んで、それぞれの田畑にさして歩いた。この時、笛・太鼓のおはやしとともに剣舞も繰り出した。	
																					トシナ(注連縄)にホウノ木・山椒の木・オニバラ・木刀・杵・草鞋を飾った。トシナの下には、悪魔よけ、悪病よけのために藁人形を置いた。男女の区別ができるようにそれぞれ陽陰(男性・女性のシンボル)を備え、だいたい1年間そのままにしておき、古くなれば焼いて、また新たな藁人形がそなえつけられた。	
																					「なんの虫もキトチャ、かんの虫もキトチャ、みんなタイ(平)さ、とんでしまえ」と唱えて虫を追った。	
																					「虫あ あっちゃいけ、あっちゃいけ」と唱えた。	
																					「なんの虫まづる(祀る)、ゴジヤムシまづる、タロムシまづる」と唱えた。	
																					ホウノ木・山椒の木・桃の木・バラの木を刺して村中を歩いた。	
																					男女一体の藁人形を作ってお神酒をあげた後、人形の体内にソバ餅を入れた。	
																					虫ボイを「ヤマドメ(田植後のサナブリ休み)」の期間に行うことからヤマヨケとも呼んだ。これは魔除けが転訛したのもともいわれている。	

岩手県北部地域の虫送り

藩政時代に盛岡藩(南部藩)領に属していた岩手県北部地域は、青森県南部地方とつながりが深く、類似の文化圏を形成しているといつてよい。県北部で行われてきた虫送り行事も、日程や行事の名称、藁人形づくりなど共通の要素を含むことから、青森県南部地方のものと同じ系統とみることができる。

特に虫送り行事が盛んだったのは、旧安代町(現八幡平市)から二戸市、久慈市にかけての、かつての二戸郡・九戸郡一帯である。青森県と同じく、そのほとんどは途絶えてしまったが、現在も「横間虫追いまつり」(7月第2日曜日/八幡平市打田内/八幡平市指定無形民俗文化財)、「中沢虫追いまつり」(7月下旬/二戸市上斗米中沢/二戸市指定無形民俗文化財)、「枝成沢虫まつり」(6月上旬/久慈市枝成沢/久慈市指定無形民俗文化財)、「高屋敷虫追いまつり」(旧暦6月24日/二戸郡一戸町高屋敷)など数カ所で行事が継承されている。いずれも幟や旗を手に、お囃子を伴った行列を組んで地区内をめぐる、悪虫・悪疫退散、五穀豊穣を祈願する行事で、高屋敷虫追いまつりを除いて行列には藁人形が付随し、最後に村境に送り出すものである。

このうち旧安代町の「横間虫追いまつり」は、戦後の昭和20年代に一時中断した後、昭和60年(1985)ところに復活したもので、現在は「横間虫追いまつり保存会」が結成されている。中断前は「虫ボイ祭り」と呼んでいたという。



1.横間虫追いまつりの藁人形づくり



2.横間虫追いまつりの行列

この行事の由来としては、江戸時代の天明の大飢饉の際、この地に来た修験者(山伏)が村人の苦しんでいる姿を見て「五穀豊穣」と「悪病退散虫追い」を唱え、太鼓を打ち鳴らして村をめぐるのが始まりとされている。

虫追いまつり当日は、午前中に横間集落の公民館前で住民が持ち寄った藁で男女2体の人形をつくる。指、腕、胴体、性器を別々の人が担当し、最後にそれらを組み合わせると高さ120〜130センチの藁人形になる(写真1)。これに墨で描いた紙の顔を貼り付け、マダの木の皮のタスキをかける。頭をこの地域の特産品であるリンドウなどの花で飾り、縄の鉢巻きをして鬼をかたどったかのような木の角を2本刺すのが、他地域の人形と異なる点である。

人形ができあがると、塩、肴、お神酒をあげて拝礼し、軽食をとったあと行列を組んでお昼過ぎに出発する。一行は「横間虫追いまつり」の幟を

先頭に、大太鼓、男人形、女人形、その後に「駒形神社」「八幡神社」「不動明王」など地元の神社名を書いた幟を持った氏子、子どもたちとその保護者らが続く(写真2)。お囃子は太鼓と手平鉦のみで笛は付かない。

「五穀豊穣」「悪虫退散」など虫追い祈願の文言を書いた紙旗は持たないが、その代わりに行列の先導者が「五穀豊穣 稲虫祓え 豊作祭りや〜」と拡声器で声高に唱え、それに応えて全員で「豊作祭りや〜」と唱和する。それを何度も繰り返しながら、集落の東はずれの曲田集落との境界まで歩いたところで、打田内川の川べりに男女の人形を並べて立て置く(写真3)。

行事が中断する前は人形を川に流していたという。復活してからはその場で焼いていたが、近年では小型トラックに積んで公民館までいったん運び、慰労会の後に公民館前の広場の横を流れる打田内川の川べりで焼くようになった。

「中沢虫追い祭り」も、男女2体の藁人形が主役の虫送り行事である。ほぼ等身大の2体の人形を先頭に、「五穀成就 悪虫悪病退散祭」などと書いた幟の白ハタ、太鼓・笛・手平鉦のお囃子、踊り手が付随した行列が、産土神の蒼前神社を出発して地区内を練り歩く。最後に隣の地区との境で人形と幟と一緒に焼き、悪虫や悪病を遠くに追い払う。

「枝成沢虫まつり」は、他地域の虫送りより早めの5月末から6月初めにかけて、早苗振りを兼ねて行われてきた。田畑の害虫を封じ込めた藁人形を何体もつくり、それを棒にくくりつけて掲げ、虫まつりの幟を立て、笛・太鼓・手平鉦で囃しながら地区内を練り歩く(写真4)。以前は人形を地区のはずれの小さな川に流していたが、環境に配慮して今はま

めて燃やしている(写真5)。

枝成沢の人形は害虫や赤飯などを詰めた「苞」という荷物を背負っている。秋田県で濃厚に分布している鹿島流し(鹿島送り)の行事でも、苞を背負った鹿島人形を見ることが出来る。また、丁髷・帯刀で侍の姿をして



3.横間虫追いまつりの藁人形。男女の人形とも lindo などの花で飾った頭に2本の角を差し、タスキをかけているのが特徴



5.害虫を封じ込めた藁人形は、最後にまとめて燃やされる(平成24年撮影・島川芳樹氏提供)



4.枝成沢の虫まつりでは、棒に括り付けた何体もの藁人形を掲げて練り歩く(平成24年撮影・島川芳樹氏提供)



7.「悪蟲退散祭所也」と書かれた紙旗は、最後に村はずれて川に流される(平成20年撮影・愛木稔氏提供)



6.高屋敷の虫追いでは、田畑に紙旗を立てて虫除けの香煎を撒く(平成20年撮影・愛木稔氏提供)

いるのもこの人形の特徴である。

西日本ではこうした藁人形をサネモリ(実盛)とする地域が多い。平安時代の武将斎藤実盛の怨霊が稲の害虫となったという説があり、実盛人形をつくってその怨霊を村外に追放するのだという。苞を背負った侍姿の枝成沢の藁人形は、鹿島人形、あるいは実盛人形と関連があるのだろうか。

「高屋敷虫追いまつり」は、1年でもっとも暑い日が続く時期に、大根の播種時期の畑と水稲の害虫、体の中にある悪虫を追い出す祭りとして、旧暦6月24日に行われる。笹竹に括り付けた紙旗を手に行列をつくり、笛・太鼓・鉦のお囃子の音を響かせながら村はずれまで行き、悪虫退散、五穀豊穰を祈願する。

途中、畑には「五穀成就 悪蟲退散祭所也」、水田には「十和田山神社悪蟲退散祭所也」の紙旗をそれぞれ立てる。この時、大麦をこがして粉にした香煎を撒き、防除祈願をする(写真6)。この香煎を水かお湯で湿らせてそのまま食すと、体内の悪虫が退散するという。虫追いの一行は最後に平糠川の川岸に到着し、ここで「岩手神社悪蟲退散祭所也」の紙旗を燃やし、川に流す(写真7)。

岩手県北部地域では、これら虫追い、虫まつりと呼称される虫送り行事と、やや趣を異にする「福田の人形まつり」(三戸市指定無形民俗文化財/8月16日/三戸市御返地福田)のような人形送りの行事も行われている。

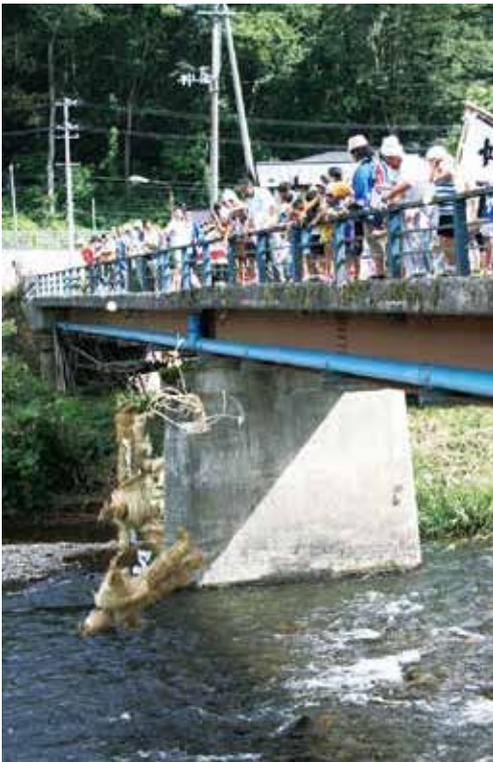
福田高清水稲荷神社境内で麦藁と稲藁で男女2体の人形をつくった後(写真8・9)、神社の幟を先頭に、幣束を持った神官、太鼓と鉦、身体の悪いところを撫でたせんべいを棒に吊るして運ぶせんべい担ぎ(写真10)



9. 女人形



8. 福田人形まつりの男人形



11. 福田の人形まつりでは、橋の上で藁人形を和合させてから川に投げ入れる(二戸市提供)



10. せんべいは家族の人数分を持ち寄って運んでもらい、最後に人形と一緒に川に流す(二戸市提供)

などの行列が出発する。台車に背中合わせに乗せた人形を子どもたちが「ヤーレヤーレ」と掛け声を発しながら引き、地区内を一巡した後、安比川にかかる沢口橋の上から人形2体をほうり投げ、川に流す(写真11)。天保年間(1830~1843)に飢饉や疫病が流行した際に、悪疫退散の祭りとして始められたといわれる。行事の根底には「悪疫退散」「豊年万作」の祈願が流れており、虫を送るといふ伝承はない。行事の呼称も「人形まつり」で、虫送り行事とは異なる系譜にあるようだ。(青森県南部地方の人形送りについては、本書の第三章を参照されたい)

第三章

虫送りに関連する人形送り、人形立て

七戸町尾山頭の虫送り

しちのへまちおやまがしら むしおく

【実施地】

上北郡七戸町尾山頭

【地域の概要】

尾山頭はかつては旧野辺地村の飛地であった。旧天間林村の集落の一つで、七戸町の北東部、東北町と隣接する位置にある。集落内の千曳神社ちびきは、「壺の石文いしづみ」を建てたという伝説があり、青森県では最古の神社といわれている。戸数は戦前22戸あったが、戦後は20戸となり、現在は17戸である。昔は馬、乳牛などを飼育していたが、今はナガイモを主とする畑作物と、「まつしぐら」という水稻粳うるち品種を栽培する稲作農家などの純農村地帯である。最近では会社勤めの若者が増えている。

【行事の名称】

尾山頭の虫送り。行事名称は虫送りであるが、内容は人形を村はずれに送る「人形送り」の行事といえる。

【行事の由来】

田畑などに虫害がなく、豊作であるように、また藁人形に吊るすおにぎりに家内安全を託す。この行事は明治のころにはすでにあったといわれるが、行事の由来ははっきりしない。

【実施の日】

7月23日(千曳神社の大祭日(旧暦6月15日)の翌日に行う)。この日は農休日とする。



2.頭部を作るため藁束を縄で縛り、縛った縄を隠すように外側に手前の藁をすべて折り曲げる



1.藁を使用するにはシベを取る



4.両腕の取りつけ



3.写真2の藁束を逆にして、手前に藁を折り曲げている

【文化財指定】

なし

【行事の主体】

保存会などではなく、集落みんなで行う。集落の代表は常会長じょうと呼ばれる。

【参加者・担い手など】

藁人形わら作りは集落の老男女。懇親会や雑用などの準備は女性が行うが、若者の姿は見えない。集落内の巡行には、子どもも参加する。

【行事の準備】

藁人形、刀、弓、トシナ（しめ縄）などの準備が必要である。藁人形、刀、弓などの製作は集落内の小屋を借りて行う。ただし、天気恵まれた時は、野外で行う。

〈人形作り〉

藁人形は、男女の年配者数人（今年
は男5人、女4人）が手分けして、当日
午前8時ごろから作業が始まった。
稲藁のシベを取り除き（写真1）、男
女2体の藁人形を作るのである。今
年は2ダン（藁束12把で1マロ、6マ
ロで1ダン）の藁を準備した。以前は
稲藁でなく麦稈むぎから（藁）を使用した。
① シベを取った藁束を、穂先側を
上にし反対側の下部から20センチ



5. 胴体、手、足をたすき掛けて縛る



6. 人形の形ができてきた



7. アメリカ原産のオーチャードは髪となる

くらしいのところを縄で縛り（写真2）、穂先側を外側に折り曲げる（写真3）。折り曲げたら穂先側が戻らないように縄で縛る。ここが頭部となる。

② 腕の部分は藁束を2つに分け、穂先を両手指先として、腕が垂れ下がらないように3尺（約90センチ）の芯材とする竹を中に入れて、頭部の下の藁の中に入れて（写真4）。また、胴体と脚部を作るため、藁束をつけ加え、胴体と手のところはタスキ掛けにして縛る（写真5）。腕となるところは手の甲を残し、2カ所縛る。脚部は胴体の途中から両足に分け、ここも2カ所縛る（写真6）。

③ 牧草のオーチャードは、戦後馬の餌にするためアメリカから取り寄せた植物であるが、馬がいなくなった現在でも道路の縁に生えている。この緑色のオーチャードを人形の髪として使用する。戦前はスゲを髪にした。オーチャードの根元の方を、紐ひもで編んでいく（写真7）。



8. 男女人形の似顔絵



9. 紙をあて、その上から髪(オーチャード)を被せる



10. オーチャードを後ろに折る



11. 髪は後ろで藁で縛る



12. 手の指を作り、仕上げは鉋で切り揃える



13. 女の藁人形に刀を差す



14. 刀は鉋で削って作る



15. 竹で作った弓矢

④ 人形面は紙に男顔絵、女顔絵(写真8)を描き人形の頭部に置く。
 ⑤ 髪の毛とするオーチャードで顔絵を押えて縛る(写真9)。

⑥ 次にオーチャードを、オールバックのように反転させ(写真10)、髪が
 乱れないように後ろを藁で縛る(写真11)。

⑦ 手と足はそれぞれ手首、足首を縛り、指は1本ずつとなるよう5本に
 わけて縛る(写真12)。

〈刀、弓矢〉

男の人形には、長い刀と弓、女の人形には短い刀をつける(写真13)。男



16. 柏葉や紙で包まれた各家の災を託されたおにぎり



17. 藁人形の両腕に結ばれた縄に、おにぎりが吊るされた



19. 藁人形を拝む



18. 集まってきた人たちが、藁人形を拝みお神酒をいただく



21. 左から笛、太鼓、太鼓、手平鉦



20. 藁人形を拝む

の長い刀は桑の木、女の短い刀はウツギの木を伐り、皮を削って作る(写真14)。刀の長さは、それぞれ73センチ、60センチである。弓矢は竹を使用する(写真15)。

〈おにぎり〉

家内の災いを託すおにぎり(写真16)は、柏葉に包んで2体の藁人形に吊るす(写真17)。村はずれまで災いを追い出すためである。最近では、チラシなどの紙で包むようになり、また、藁人形が村内を練り歩く時に吊るすのではなく、集会所に持ってきて出発前に吊るすようになった。

〈出発前の神事〉

藁人形の準備ができたなら、集会所の入口前に2体を並べ、お神酒が供えられる。参加者は藁人形を拝み、お神酒をいただく(写真18・19・20)。



22.藁人形を先頭に出発した行列



23.先頭の藁人形を持つ男女



24.笛、太鼓、手平鉦が行列に加わる



25.女性も笛を吹き、鉦を鳴らす

〈行列に持参する物〉

太鼓、笛、手平鉦てびらがね(写真21)

【集落内の巡行】

準備がすべて整ったなら、集落内の巡行に出発する。田畑の作物に悪虫の害がないように、豊作になるように、家内に災いがないようにと、笛、太鼓、手平鉦で元氣よく音を立て練り歩く。太鼓のリズムは、「ドーン・ドーン・ドーン・ドーン」の繰り返しである。途中、家から子どもも加わって賑やかにやってきた。集会所を出発した一行(写真22・23・24・25・26)は、ゆっくり村内を進行し、やがて前もって作っておいたトシナ(注連縄)を張っている東北町との境である村はずれに向かう。村境に着いたら、杉の木の

根元に2体の藁人形を並べる(写真27)。並べ終えた瞬間、「ホリヤー」と大声を立て一目散に村に走って帰る(写真28・29)。藁人形が抱えた災いが、追い駆けてこないようにするためといわれる。行事が終了し、集会所に集まり懇親会を行う。

【尾山頭の虫送りの特徴】

尾山頭の虫送りは、男女2体の刀を差した藁人形を作り、集落を巡り歩き、村はずれの木の下に人形を置いたら、「ホリヤー」と声を出し人形に追いかけてられないように大急ぎで走って帰ってくる行事である。また、各家々の災いは柏葉で包んだおにぎりに託し、人形に持たせてやるのも他村に見られない特徴である。



27.村はずれの杉の元に藁人形を置く



26.村はずれに進む行列



29.村へも走って帰る



28.「ホリヤー」と叫び、走り帰る



30.村外に送り出された藁人形

【行事の存続】

行事の日程が村内神社の例祭の翌日であり、また、戸数が17戸と少ないためか、村人の結束が堅い。若者が見当たらないのが少し気になるが、行事は存続されていくだろう。

南部町正寿寺の人形まつり

【実施地】

三戸郡南部町小向正寿寺

【地域の概要】

南部町は三戸郡内の東部に位置し、東は八戸市、北から西にかけて五戸町、三戸町、南は岩手県境に接する。町の中心部を馬淵川が東西を横断するように流れ、平地は少なく丘陵地帯が大部分を占める。平成18年1月1日に旧南部町と名川町、福地村が新設合併し南部町となった。

調査地の正寿寺は町の西部、馬淵川左岸のなだらかな丘陵地に開けた戸数40戸の集落。周囲はリンゴ畑が広がり、果樹栽培を中心とした純農村地帯となっている(写真1)。

南部町は南部藩発祥の地といわれ、正寿寺には南部氏の菩提寺であった三光寺をはじめ、第27代藩主南部利直の霊屋(青森県重宝)、利直の四男利康の霊屋(国指定重要文化財)、南部藩二代藩主実光の墓所などがあり、南部氏と大変ゆかりの深い場所である。

【行事の名称】

人形まつり



1. 正寿寺集落遠景。後方の山は名久井岳(615メートル)

【行事の由来伝承】

祭りに関する古い記録が残っていないので確かなことはわからない。江戸時代中ごろに始まったと言いつた伝えられており、戦時中も中断することなく続けられてきた。

行事名を虫ボイという人もいるが、実際には人形を作り、集落をめぐってから焼いてしまう厄払いの人形送りの行事で、かつては人形ボイとも呼んでいた。

祭りの目的としては、人形に悪疫・災厄を託して送り、同時に秋の実りと五穀豊穣を祈願するためといわれている。

現在、正寿寺では虫追い行事を行っていないが、かつては人形まつりとは別の日に実施し、紙旗に「悪霊退散」などと書いて、笛・太鼓を鳴らしながら村を練り歩いたものという。この2つは本来別々の儀礼で、人形まつりだけが今に継承されたようである。

【実施の月日】

8月27日(集落の産土神である熊野神社の例祭の最終日で、戦前は旧暦8月27日に行われた)

【文化財指定】

なし

【行事の主体】

集落全体の祭りとして正寿寺町内会(坂本瑞男会長)が主催するが、人形づくりや祭りの進行は熊野神社の氏子を中心となって行う。保存会などは結成されていない。

【参加者・担い手など】

人形づくりは氏子を中心とした男性が行う。女性はお昼と直会なおらいの飲食の用意をする。人形追いの行列には誰でも参加できるが、子どもたちとその保護者が主である。ほかに神楽の舞い手、駒踊りの踊り手、囃子方が行列に付随する。

【行事の実施内容】

〈準備〉

人形まつりは8月24日から27日までの熊野神社の例祭に合わせて開催される。24日は宵宮で神社の鳥居前に大きな幟のぼりを6本立てる。これをハタ上げという(写真2)。25日は神社の拝殿に氏子が参集し、三光寺の住職による祈祷後、お祓いをしてもらう。

寺の住職が神事を執り行うのが不思議だが、それには理由がある。神社はもともと別の場所にあつたが、江戸末期に火事で焼失してしまい、その後、明治の神仏分離を経て三光寺の観音堂を熊野神社としたのだという。いわば建物を間借りしている状態で、そのため神社は寺の境内にあり、管理も三光寺がしている(写真3)。

26日は熊野神社周辺の草刈りの日。神社に隣接して南部藩主の霊屋や墓所などの史跡があり、背後の台地にはリング畑が広がっている。この一帯の草取りを集落総出で行う。そして27日が人形まつり当日となる。昭和40年代初めころまでは、祭りの期間中は境内に歌や踊りを演ずる舞台が立ち、盆踊りの「ナニヤドヤラ」を楽しんだが、参加者の減少などからやめてしまった。



2.熊野神社参道の幟



3.熊野神社社殿

〈人形づくり〉

祭りの日は朝8時から神社境内(実際には三光寺境内)にビニールシートを敷き、4隅をお神酒と塩で清めた後、2体の藁人形わらわづくりにとりかかる(写真4)。以前は麦藁だったが材料の入手が困難になり、現在は稲藁を使っている。

人形づくりの参加者は例年12〜15人ほどで、男の人形と女の人形に半分ずつに分かれ、初めは藁の分量と長さを手、足、胴、頭のパート別に揃え、束ねる作業から進めていく(写真5)。人形の胴体と両足の骨組みには二股に分かれたくるみの木を用い、束ねた藁をかぶせていく(写真6)。

両腕と頭の部分も木の枝を芯にして藁で肉づけし、それに縄を巻いて縛る(写真7)。手先、足先は切り揃えてから藁を5本に分けて縛り、指を作る(写真8)。男の人形は頭の部分に丁髷ちよんまげを付ける(写真9)。

頭、胴、手足が形作られた後、女の人形の胸部分を丸く曲げて乳房を作



5. はじめは各パート別に藁を束ねる



4. 設計図のない人形づくりがスタート



7. 男人形の全身像がみえてきた



6. 人形の骨組みづくり



9. 男人形の頭部



8. 手先を切り揃える



11. お腹を膨らませた女人形



10. 女人形は胸部を強調する

る(写真10)。腹の部分にも丸めた藁を入れ膨らませるが、これは妊娠していることを表わしている(写真11)。安産祈願とも、秋を迎えて作物の実りを期待する呪術的な意味合いが込められているともいう。

人形本体ができあがると神社参道の杉の木に立てかけ、マジックペン

で男女別に顔を描いた紙をセロファンテープで貼り付ける(写真12)。

これに男の人形はキュウリとナスで作った男根と睾丸をつけ、腰にシメ縄を巻いて木の刀を大小2本差す(写真13)。女の人形にはキュウリと赤トウガラシで作った女陰を付ける。トウモロコシの髭を陰毛に見立



12.男の人形は高さ約3.6メートル、両腕の長さ約2.3メートル。女の人形は高さ約3.9メートル、両腕の長さ約2.4メートルに及ぶ。青森県南部地方の人形送り・虫送り行事で見られる藁人形や茅人形の中では、最も大きなものに属するといえるだろう

て、なかなかリアルな造形である。結んだ髪を花で飾り、腰に小刀を差すと完成である(写真14)。ここまでおよそ2時間半を要する。

2体の人形の足元を見ると、馬の頭部の形をした藁人形が置いてある。この小さくて素朴な人形は、近隣町村の同類行事では正寿寺にだけ見られるもので、「馬っこ」と呼ばれている(写真15)。

明治時代に子どもたちの不幸が続いた年があり、その魔除けとして作られたのが始まりで、かつては祭りの朝に子どもたちが腰に「馬っこ」を巻きつけて、大声をあげながら集落を駆け回ったという。駒踊りの源流のよ



14.女人形



13.男人形

うな子どもたちによるこの習俗は廃れてしまったが、今でも人形まつりで必ず作られ、最後には人形と一緒に焼いている。



15.腰につけると駒踊りの馬のように見える「馬っこ」



16.男女の人形の元での憩いのひととき

〈中休み〉
人形づくりが終わったところで、女性たちがお好み焼き、焼き鳥、くるみ餅、おにぎりなどを持ち寄って、境内でひと仕事を終えた男性たちとの慰労会となる(写真16)。お昼の中休みと夜の直会の料理は人形づくりと並行して、毎年女性たちが地区の集会所で調理することになっている。

午後1時になると、神社参道の幟を下ろす。このあと氏子や女性たちは自宅へ戻るなどして、祭りの進行は4時ころまでいったん中断する。

この間、参道に立てかけた男女の人形に集落の住民が三々五々詣でて、胸や腰に棒を刺し、それに袋菓子やチョコレートを吊り下げて挿んでいく(写真17)。昔から自分の身体の悪いところ、痛いところに吊り下げ



17.左の腰には馬っこを下げている

る(刺す)と痛みが和らぐといわれ、厄払いの願いも込められている。以前はあらかじめ身体の調子のよくないところに当てたりさすったりしたせんべいを持って来るものだったが、最近はお菓子が多くなつた。人形を焼く前に子どもたちが食べる際、せんべいよりお菓子のほうが好まれるからというのが、その理由らしい。

〈出発前の神事〉

午後3時30分ころから、氏子たちや祭りの関係者が再び神社に集まってくる。4時ころに参道に立てかけていた男女2体の人形を、2台のりヤカーに移し乗せ、縄で動かないよう括り付ける(写真18)。



18.人形が大きいので大人5人がかりでリヤカーまで運び、据える

4時30分に神社拝殿で神事が始まる。神官や三光寺の住職によらず、氏子10名ほどのみで執り行われる。獅子頭と駒踊りの馬が並べられた神前に参列し、全員で二礼二拍手一礼した(写真19)後、正寿寺の神樂を奉納する(写真20)。

この神樂は赤い獅子頭を捧げて舞う獅子舞で、主に悪魔祓いの祈禱を目的とした太神樂系である。同系のもは正寿寺だけでなく近隣の地域にも伝わっている。初めは大鼓、笛、手平鉦による「スガ」という囃子で始まるが、舞う前に笛の奏者が次のような口上を述べる。

「天の岩戸に隠れし神は 天の岩戸を押し開く今は世に出て 日を照らす オーイ」



19.熊野神社神前での神事

「押し開く いざや神樂は舞い遊ぶいなしろ平の御幣を持って 悪魔を祓って ヤッコラセー ヤッコラセー」

獅子頭が拝殿内を一回りした後、次は「七の段」という囃子に合わせ、右手に錫杖しゃくじょう、左手に幣束へいそくを持ち、四方を祓う所作をしながら舞う。いずれの舞も歯打ちはしない。次に笛の調子が高く変わると「狂い獅子」という囃子になり、神前で獅子頭を大きく左右に振る悪魔祓いの所作を繰り返してから、次のような問答がある。

「待った 待った」

「次は正寿寺熊野神社のご祈禱」

「おあとは」

「天下泰平、五穀豊穰、家内安全、交通安全、ご祈禱のため」



20.氏子総代が見守るなかで神樂が奉納される

最後にもう一度床に伏すように頭を振ってから神前で獅子頭を脱ぎ、終了となる。

続いて駒踊りが奉納される。駒踊りは木製の馬(駒形)を腰につけ、笛、太鼓、手平鉦の囃子に合わせて跳ねたり回ったりしながら勇壮に踊る芸能で、藩政時代の牧場の野馬捕りの様子を舞踊化したものといわれる。古くから馬産地として知られてきた南部地方一円で継承されているが、正寿寺で踊られるようになったのは比較的新しく、大正時代によその駒踊りから伝えられたという。また、現在用いられている木馬は戦後に作られたそうで、痛みもなく大変美麗なものである(写真21)。

以前は中学生や高校生が踊り手だったが、児童・生徒数の減少で確保が難しくなったため、現在は40代〜50代のお母さんたちが踊りを習い、引き継いでいる(写真22)。例年は神社境内で踊るが、この日は午後から雨模様になったため、拝殿内に場所を移して演じられた。



21.駒踊りの木馬



22.正寿寺駒踊りの伝統は女性たちが担う

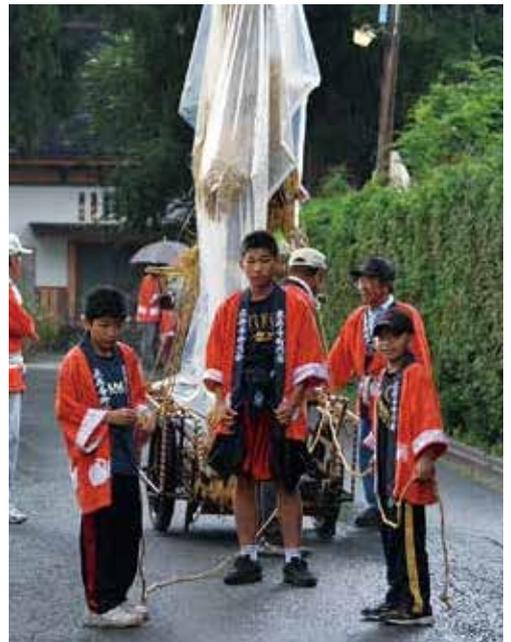
神楽、駒踊りの奉納が終わると、氏子全員でお神酒をいただき、神事が終了する。

〈集落内の巡行〉

午後5時、熊野神社から人形追いの行列が出発する。男女の藁人形を乗せた2台のリヤカーに長い綱をつけ、それを法被姿の子どもたちが引いて集落を一巡する(写真23)。この日は雨のため随行しなかったが、本来は駒踊りが人形を先導するように、集落の要所所で演じる。

人形の巡行コースに沿って神楽が集落の家々をまわるので、行列もそれに歩調を合わせて休憩しながらゆつくりと進む。全体にのんびりした巡行である(写真26・27)。

獅子は一軒ごとに玄関前で「七の段」の囃子に合わせて舞い、その家の悪魔祓いをする(写真24)。子どもやお年寄りのいる家では、獅子が頭や肩を嘯む身固めしてもらい(写真25)、舞い終わるとご祝儀が出る。



23.この日は夕方になって小雨が降ってきたため、人形をビニールで覆い集落をめぐる



26. 神楽が家々をまわっている間、人形の行列は待機する



24. 獅子は集落内の家々をくまなくまわる



27. 藁人形を焼く前、吊り下げていたお菓子は、子どもたちが自由に取って食べてよい



25. 新築の家は中に入り悪魔祓いをする

1年以内に不幸のあった家以外は、基本的に集落全戸を訪問するので、すべてまわり終えるのは午後7時近くになる。このころになると、行列の人数も神社を出発した時より増え、30人ほどになっっている。日も暮れて薄暗くなつた中、「ヨーシヨイサ ヨーシヨイサ もう



28. 焼く前に男女の人形を合体させる



29. 点火するとすぐに炎が上がる

少しだ頑張れ」と大人たちがリヤカーを引く子どもたちに声を掛ける。人形巡行の道中では、特別な唱えごとや囃しことばはなく、「ヨーシヨイサ」は三戸町の三戸三社大祭(三戸まつり)の山車(だし)を曳くときの掛け声を、便宜的に用いたものである。

へ人形を焼くへ

すっかり暗くなつた道をたどり、人形は集落の南の外れ、隣村の門前地区との境界付近の空地まで運ばれる。ここでリヤカーから男女2体とも下ろし、棒で支えて抱き合わせ立てたところで交接部分のあたりに火を点ける(写真28・29)。

小さな炎がまたたく間に暗闇の中で大きく燃え上がり、人形はオレンジ色の炎に包まれる(写真30)。あたりに藁の焼ける匂いが立ち込め、激しく燃えて火の粉も飛ぶ。この間、神楽の「七の段」のお囃子がずっと奏でられ、獅子も焼ける人形を見守る。



30.男女2体の藁人形は合体したまま炎に包まれる

時間にして4分〜5分で2体の藁人形は燃えて崩れ落ちてしまうが、完全に燃え尽きる前に参列した一同で万歳三唱をする。人形が身代わりとなって災厄を祓ってくれたことへの感謝の気持ちからであろうか、誰彼となく拍手をし、人形まつりの集落巡行はこれで終了となる。

このあと氏子、神楽、囃子方など祭り関係者は熊野神社に戻り、再度神前で神楽と駒踊りを奉納した後、人形まつりも含め、24日から4日間続いた熊野神社例祭の直会が拝殿内で行われる。

【行事の存続】

以前は虫追い、盆踊り(「ナニヤドヤラ」)、熊野神社のお祭りでの演芸会など、集落全員が参加し楽しむ行事があつたが、今はどれも廃れ、残っているのは人形まつりだけとなった。そのため、この祭りを絶やしてはならないという意識が住民にある。祭りに付随して集落をまわる獅子舞と駒踊りが果たす役割も大きい。獅子舞は舞い手がおり、駒踊りは小学生から引き継いだ婦人会の女性たちが熱心に覚えてくれているので、今のところ途絶える心配はないようだ。

最も懸念されるのは、人形づくりの担い手の平均年齢が65歳以上と高齢化していることである。祭りの日は平日の場合が多いので、勤めている人が休めないため日曜日に変えようという意見もあるが、熊野神社の例祭に合わせているのでそれも難しい。ただ、祭りの運営に携わる神社の氏子の組織がしっかりしており、現時点では継続の障害となるほどの大きな問題はない。

十和田市板ノ沢の人形立て

【実施地】

十和田市板ノ沢

【地域の概要】

板ノ沢集落は、十和田市庁舎の西方約5キロの八甲田山系東麓に位置する。以前は、藤坂・方内・横倉・館・滝沢・梅・深持・晴山・五十貫田・立崎、そして板ノ沢と、この地域の多くの集落で藁または茅人形づくりが行われていたが、近年、継続していたのは、わずかに梅と板ノ沢の2集落だけとなっていた。その梅集落も継承者不足で平成25年で途絶えてしまい、唯一、板ノ沢集落に残るのみとなった。

【行事の名称】

板ノ沢の人形立て

【行事の由来】

正確な記録・文献は残っておらず、「記録した文書がある人が持ち帰り、暫くしてその方の家が火災に遭い、消失した」とも、江戸時代の享保年間(1716～1736)に始まったとも伝えられている。また一方で、茅人形が安置される「御瀧大龍神社」に、「卯辰両年餓死精霊等」の碑がある。建立年は、文化12年乙亥年(1815)で、天明の飢饉(天明卯辰・1783～1784)から32年後である。大凶作・飢饉から、ある程度ゆとりや潤いができるようになってから建立された、当地域で葬られた方々の供養碑であろう。言い伝えでは、このころから無病息災・五穀豊穰・安

全祈願・安産祈願等を人形に託し、奉納したとされているが、定かではない。

【実施の月日】

7月の「海の日」(平成25年は7月15日。以前は旧暦の6月24日↓新暦の6月24日↓7月24日。平成14年から現行)

【文化財指定】

なし

【行事の主体】

板ノ沢自治会(会長・沢目豊)

【参加者・担い手など】

板ノ沢地域の67世帯の各戸から1人と、子ども会とその父兄、老若男女総勢100人ほどで行われる。(子どもは20～30人。平成14年から子ども会として参画)

【行事の準備】

朝8時に地区集会所前に集合し、点呼を取り、自治会長挨拶の後、隣家の倉庫(作業小屋)にて作業が始まる。それと並行して、前年に安置していた茅人形を4～5人で取り外す。また、道路を挟んだ向かい側の広場にて、子ども会及びその父兄と老人とで、小さな藁人形を2体ずつ作る。

【出発前の神事】

人形完成後の神事は執り行わない。

【行列に持参するもの】

人形が大きいためか、現在では行列は組まず、それぞれの人形を2台の軽トラックの荷台に乗せ、安置場所に向かう。小さな藁人形を作った

人たちは、自分で作った2体の人形を持ち安置場所に向かう。年配の人たちは(主に女性)、藁で縛ったり、袋に入れた供物(餅・飴・お菓子等)を持ち、人形設置後、人形の周囲の木に括りつける。

【集落内の巡行】

行列や巡行は行わず、製作場所から直接、安置場所に向かう(約300メートル)。

【保存状況】

毎年作りかえるため、状態は良好である。

【行事に使用する道具類】

茅を切る大鋏ばさみ・小鋏ばさみ・カケヤ・ナタ・茅を切り揃える板・マジックペン(赤・黒)

【人形の材料】

茅・稲藁・カマス・稲縄・芯材になる雑木の棒・大小の刀・櫛くし・男性器の棒、女性器の縄と細い棒・紐ひも(カマスが手に入らないため、福井県からインターネットで購入)

【茅人形の製作及び設置】

人形は、安置するように、左―男、右―女と並べて、それぞれ5、6人ずつに分かれて製作する。本体とは別に、男性器・女性器まげ・鬚まげ・櫛くしを分担で製



1.集会所前に集合(板ノ沢転作営農センター)



2.茅を搬入し、束ねて揃える



3.最初に芯材の棒を組む

作。

- ① 長さ約1.5メートルの芯材の棒を、鳥居状に組み、縄で結わえ、それに茅を束ねて巻きつけていく(写真3・4)。
- ② 茅をカケヤで敲き締めながら縄で縛っていく(写真4)。
- ③ 男女それぞれの鬚を作る。藁を束ねて縄で括る。その鬚に、頭に刺し込むための棒を付ける(写真5・6・7)。女の鬚は、大きく丁寧にする(写真8)。男のものより太い棒に藁を括り、箒ほうきのようにビニール紐で編み込むように縛る(写真9)。板で作った櫛を挿し込み、生花を飾り完成(写真10)。
- ④ 男性器・女性器を作る。男性器の素材は、桐やホウノキなど、軸に穴が開いているもので作る。太さ(直径)5〜6センチ、長さ約50センチで、リアルに削りだしている(写真11)。毎年作るものではなく、作り手が決まっています、古くなったら交換する。女性器は、板ノ沢では取り付けていなかったが、隣接する梅集落での存続が不能となったため、梅集落のもの



5. 男の人形の髷を作る



4. 棒に茅を巻きつけていく



7. 男の人形の髷に刺し込む棒を取りつける



6. 女の人形の髷に刺し込む棒を削る



9. 女の人形の髷を編み込む



8. 女の人形の髷を作る



11. 性器先端部



10. 女の人形の髷完成

を模倣して、今年から取り付けている。大小2つの楕円の縄を組み合わせて、女性器を表現している。黒く塗った細い棒を20本くらい縄に刺し込み、陰毛を表現する(写真12)。

⑤ 1体にカマスを2枚使用する。1枚は頭の部分に、カマスを裏返しに

して被せる。もう1枚は縦に切って広げて、胸と前垂れにする。前垂れには、男女別々の幾何学模様を書き込む。(この模様は、青森県南部地方に古くから伝わる「刺子」という、作業着を丈夫にさらに美しく見せる技法からきている)

- ⑥ 顔は、型紙を当ててマジックでなぞって描き入れる(写真13・14)。口は赤いマジックで描き入れるが、以前は前垂れの模様も含め墨で描き、黒1色であった。
- ⑦ 幾何学模様を書きこんだ前垂れを捲り、男性器(写真15)・女性器(写真16)を取り付ける。
- ⑧ 全体を縄で縛って、敲き締めながら形を作っていく、手足等の先端部を板で叩いて、茅を押し込めながら揃える。はみ出した部分を大小の鋏で切り、刈りそろえるようにして綺麗に仕上げる。腕は、横に一直線に伸ばし、手は、5本の指が分かるように縄で括る。足は、先端部10センチほどの約4分の3を切り落とし、前面部分の残り4分の1を折り曲げて足の甲と指を表現する(写真17)。
- ⑨ 縦に切って広げたカマスは、上半部が胴部、下半部が前垂れとなる。胸に2つの円を描き、中央に小さい丸で乳首を表す。女は、円をやや大きく描き、乳首を赤く描き込む。それぞれの胸の中央部でクロスするように縄を五重に巻く。腰にも前垂れの上部に横に巻く(写真17)。
- ⑩ それぞれの鬘と刀2本(大小)は、人形を安置してから取りつける。
- ⑪ 完成した人形は、男の人形が高さ3・3メートル、女の人形が2・6メートルで、それぞれを、2台の軽トラクの荷台に梯子を斜めに立てかけた上に、仰向けに乗せて神社境内の安置場所に運ぶ(写真18・19)。
- ⑫ 人形の設置は、女の人形から設置し、最後に鬘を付ける(写真20)。次に男の人形を設置し、鬘と腰に刀を取りつける(写真21・25)。
- ⑬ 参加者及び奉納者は、軽トラクに積んだ茅人形に続いて、人形製作場所から各々歩いて安置場所(神社境内)に向かう。



13.女性の人形の顔を描く



12.藁で作った女性器(右一上部・左下部)



15.男性器をつける



14.男の人形の顔を描く



16.女性器を付ける



17.完成した人形を立てかける



18.男の人形を積む



19.人形安置場所

⑭ 現地に着いてからは、各々談笑したり、設置作業を見守る。子どもたちは、完成を待ちわびながら、周辺で遊びまわる。

⑮ 2体の人形設置後、持ち寄ったお菓子等の供物を、周囲の木等に括りつけ、茅人形の足元に小藁人形を置き、設置完了(写真23・26)。

⑯ 自治会長が、お神酒を捧げて拝礼・祈願し、その後、みな続き、各々の供物を下してふるまう。

⑰ 最後に参加者全員で記念撮影して終了する(写真43)。その後、朝に集合した集会所にて慰労会を行う。

【藁人形(小人形)の製作】

茅人形製作と並行して、向かいの広場で、子ども会とその父兄、そして年配の人たちで藁人形を作る(写真27～30)。

① 一握りの藁1束、直径5センチほど、長さ70～80センチのものをきれいに揃えて束ね、頭・胴・足の要所を約5センチ間隔で縛る。

② まとめた束の半分を本体にする。頭部は、藁束の芯の部分をそのまま

残し、外側の藁を外に折り込んで、頭部から下の部分を太くする。首の部分できつく縛り、頭の上に伸びた芯の部分で鬘を作る。鬘は、男女では、髪型が異なる。

③ 腕は、胴部より細く束ねたものを、胸・肩の部分に横から差し込み、片方で3カ所くらい縛り、手は、手首のところで縛った先を箒状に広げて、指の部分も縛る。

④ 足は、体部を半分に分けて、2本の足を作る。腕と同様に片方で3カ所くらい縛り、足首のところで縛った先を箒状に広げて、指の部分も縛る。

⑤ 40～50センチ大の人形が完成した後、最後に、女の人形の頭に生花をあしらう。

【前年の人形の焼却】



21. 男の人形の鬘を付ける



20. 女の人形の鬘を付ける



23. 藁人形・供物を持ち寄り



22. 設置完了



25. 男の人形に刀を差す



24. 自転車のカゴの中の子もたちの藁人形



27. 広場で藁人形作り



26. 藁人形・供物の奉納

① 新しい人形づくりが始まるとともに、別班数名(4〜5人)が、神社境内に祀^{まう}っていた古い人形を取り外し、女の人形を下に仰向けにし、その上に男の人形を被せて火を点^つける(写真31〜39)。

② 先に、女の人形を外して空き地に仰向けにして置く(頭を東、足を西)。次に、男の人形を外して、女の人形の上に被せる(写真35・36)。

③ 男の人形の尻のあたりに、小藁人形を乗せて、点火する(写真37・38)。



29.藁人形作りの指導



28.藁人形作り



31.古い藁人形(茅人形の足元)



30.藁人形作り



33.古い女の人形



32.古い男の人形



35.男女2体の人形を合体させる



34.茅人形の取り外し

④ 安置場所を、きれいに掃き清める(写真39)。
【行事の存続】

行事の体制・統率はよく整っているが、現在、当地方においては唯一の行事となってしまう。各戸からの参加、子ども会及び保護者の参加等、

板ノ沢地区総出での行事は、他の地域が年々消滅したり、存続が危ぶまれている中で、希有である。

当地方に伝わる人形作りの中で、3メートル級の巨大な人形作りは、十和田市内の梅集落と板ノ沢集落の2カ所のみとなっていたが、過疎化



36. 藁人形を運び女の人形の上に男の人形を被せる



37. 人形に点火する

供養し建立したものと考えられる。小さい藁人形を供える風習は、このころから始まったのではないかという説もある。当初、子どもの供養であつたものが、子どもの無事成長を願い、安産祈願、子孫繁栄等の願いを込めて祀るものとして継続されてきたのであろう。

や高齢化のため、梅集落の人形作りは、今年で行われなくなった。

唯一残るのが、板ノ沢集落である。

梅集落は、板ノ沢集落の西方約3キロの山間に位置し、隣接している。しかし、大きさ、作り方などは酷似しているが、風貌や供え物等、多少異なるところもある。梅集落では、人形の胴体に、ソバ餅を刺す。このソバ餅は、本家が5枚、分家が3枚と決められている。また、板ノ沢集落では、茅人形の足元に、小さい藁人形を供える。これらは、お互いがない風習である。

茅人形が安置される「御瀧大龍神社」にある「卯辰両年餓死精霊等」の碑に、「当村の母、左衛門五郎の母、小三郎の母、半五郎母、久之助母」という名が刻まれている。天明の飢饉から32年後に、亡くなった子どもを



38. 燃える人形



39. 安置場所を掃き清める



40. 前年(平成24年)の古い人形



42. 御瀧大龍神社



41. 平成25年の新しい人形



43. 参加者集合写真

十和田市梅のカヤ人形結い

【実施地】

十和田市梅

【地域の概要】

梅集落は、十和田市庁舎の西方約8キロの八甲田山系東麓に位置する。以前は、藤坂・万内・横倉・館・滝沢・板ノ沢・深持・晴山・五十貫田・立崎、そして梅と、この地域の多くの集落で藁または茅人形づくりが行われていたが、梅集落も継承者不足で、平成25年で途絶えてしまうこととなり、唯一、板ノ沢集落に残るのみとなった。

【行事の名称】

梅のカヤ人形結い

【行事の由来】

正確な記録・文献は無く、定かではない。

【実施の日付】

6月15日。以前は旧6月24日に行っていたが、昭和37、38年ごろから神社の例祭である新暦6月15日に行うようになった。



1. 梅集落遠景

【文化財指定】

指定なし

【行事の主体】

梅自治会（会長・福沢繁雄）

【参加者・担い手など】

梅地域の8世帯毎戸からの、ほぼ全員で行われる。

【行事の準備】

朝8時に地区集会所に集合し、集会所前にて作業が始まる。

人形の材料のカヤは、前年の秋に、毎戸で3束ずつ刈って、乾燥させて管理しておく。

【出発前の神事】

人形完成後、人形にお神酒を供えて祈願する。

【行列に持参するもの】

人形が大きいためか、現在では行列は組まず、それぞれの人形を2台の軽トラックの荷台に積み、安置場所に向かう。人形完成後、人形の胴体にソバ餅を刺す。ソバ餅は、本家が5枚、分家が3枚ずつ人形1体の胸に刺す。

【集落内の巡行】

行列や巡行は行わず、製作場所から直接、安置場所に向かう（約300メートル）。以前は、人形1体を1人で担いで安置場所まで運んでいたが、



2. 集落の入口にトシナ(注連縄)を張る

現在は、軽トラックで運ぶ。

【保存状況】

毎年作りかえるため、状態は良好であるが、行事は取材した年(平成25年)で途絶えたため、翌年の例祭の際、捨てられて終わってしまうことになる。

【行事に使用する道具類】

カヤを切る大鋏ばさみ・小鋏ばさみ・カケヤ・ナタ・マジックペン

【人形の材料】

カヤ・稲藁・カマス・ゴザ・稲縄・芯材になる雑木の棒・大小の刀・櫛くし・男性器の棒、女性器の縄と細い棒・紐ひも

【茅人形の製作及び設置】

人形は、概ね2・5メートルぐらいの大きさを製作するが、前年度刈り入れたカヤの大きさを製作する。本体とは別に、刀・櫛・男性器・女性器を



3.茅・稲藁を搬入



4.足を作る

別分担で製作する。

① 人形素材のカヤ・稲藁わら等を製作場所に運び、2・5メートルぐらいの長さの人形の形にまとめる(写真3)。

② 足の部分は、物差し代わりの棒を基準にして、縄で束ねる(写真4)。

③ 胴は、カヤの中に藁を入れて縄で束ね、それに棒を刺し込んでカヤを巻きつけて腕にし、5本の指は、カヤの先端を縄で括って作る(写真5・6)。

④ 前垂れ(前掛け)を作る。前垂れの中央部に、梅の花の模様を円形の小の蓋ふたを型にして、黒マジックで描き入れる(写真7)。

※集落名の「梅」になぞらえてのことであろうが、いつごろからのものか、由来等は不明である。隣の板ノ沢集落では、「南部刺子さしこ」の幾何学模様を描き入れる。

⑤ 男性器・女性器を作る。

男性器の素材は、桐かホウノキなど、軸に穴が開いているもので作る。太さ(直径)10センチ前後、長さ約60センチで、ナタでリアルに削りだしていく。女性器は、大小2つの楕円の縄を組み合わせて表現している。黒く塗った細い棒を20本くらい縄に刺し込み、陰毛を表現する(写真8・9)。

⑥ 1体にカマスを2枚使用する。それぞれ縦に切って、1枚は頭と胸の部分に、もう1枚は胴・腰部と前垂れにする。人形の前面から巻きこんで包むようにして、縄で締めながら縛っていく(写真10・11)。女性の人形の胸には、藁を入れて膨らみをもたせる(写真12)。

⑦ 頭の部分にも藁を束ねて入れて鬚まげを結う(写真15・16)。

⑧ 顔・胸はマジックペンで描き入れる。以前はすべて墨で描き、黒1色



6. 胴・腕の部分を縄で締める



5. 腕を作る



8. 男性器を作る



7. 大小の円形で梅の花を表現



10. 下半部のカマスから固定する



9. 女性器を作る



12. 女性の胸に藁を入れる



11. 下のカマスの上に上部を被せる

であつた(写真13)。

⑨ 全体を縄で締めながら整形していき、最後に針状の金棒を腹部の中央付近に刺し込んで縄を通し、型崩れしないように固定する(写真14)。

⑩ 男女の鬚を作る。女性人形の頭部には、櫛を挿す(写真15・16)。

⑪ 前垂れを捲り、男性器・女性器を取りつける(写真17・18)。

⑫ 男の人形に大小2本の刀、女の人形に、脇差を差す(写真19)。

⑬ 完成した人形は、集会所前の辻掲示板前に仮安置する(写真20)。その横にお神酒等を並べて準備する(写真21)。



13.顔を描きいれる



14.腹部に縄通しの金棒を刺す



15.男の人形の鬘を作る



16.女の人形の鬘を作る

⑭ 最後に刀を差して人形が完成した後、それぞれの人形の胴体に串に刺したソバ餅を、本家(3軒)が5枚、分家(5軒)が3枚刺す。串の樹種は、タラの木を削ったものを使う。

※タラの木は、ソバ餅を焼く際、焦げにくく殺菌効果があるとのこと。

⑮ 各々家長が、ソバ餅を刺して人形の完成である(写真22)。仮安置場所前にて、人形に拝礼し(写真23)、供えたお神酒をふるまう(写真24)。それとともに、行事参加者・参集した人・観光客に、ソバ餅が焼いてふるまわれる(写真25)。

⑯ 人形に刺すソバ餅やふるまうソバ餅は、集会所にて人形製作と並行して作られる。老若の女性総勢で、多い時は500枚のソバ餅を作る。人形に刺すソバ餅は生のもを刺すが、ふるまうソバ餅には、ジュネ味噌をつけて焼いて食する(写真26・27)。

⑰ 人形完成後、仮安置場所にて製作者の記念撮影をし、その後、軽ト

ラックに2体の人形を積んで、設置場所に向かう(写真28)。人形を積み込む際は、向き合わせる。

⑱ 新しい人形の搬入とともに、古い人形を取り外す(写真29)。

⑲ 古い人形を取り外した後、新しい人形を、左に男(写真30)、右に女(写真31)と設置する。

⑳ 取り外した古い人形は、集落入口の長塚付近の沢に棄てる(写真32)。沢には、代々作られて棄てられた人形が積み重なって朽ちている。その上に、取り外した人形を、男女向き合わせて棄てる。

㉑ 人形設置場所に備えつけられた太い木杭に、左側に男、右側に女の人形と並べて、縄でしっかりと固定する(写真33)。

㉒ 安置場所に人形を設置した後、再度、集会所前で行ったように、人形にお神酒を供え、拝礼して祈願した後、お神酒・ソバ餅をふるまう(写真36・37)。

⑳ カヤ人形作りの全ての行事が終了した後、「白龍大明神」神社にて宴を催す。



18.女性器を取りつける



17.男性器を取りつける



20.辻掲示板前に仮安置



19.人形に刀を差す



22.ソバ餅を刺す



21.仮安置所横に御神酒等の準備



24.お神酒をふるまう



23.人形に拝礼



26.ソバ餅をふるまう



25.ソバ餅作り



28.人形の積み込み



27.ソバ餅を焼いてふるまう



30.男の人形の設置



29.古い人形の取り外し



32.重ねて代々の古い人形の上に乗てる



31.女の人形の設置



34. 大小の刀を差す



33. 人形を固定する



36. 人形に拝礼する



35. ソバ餅を刺す



37. お神酒をふるまう



38.完成した人形

【行事の存続】

青森県南部地方に伝わる人形作りの中で、3メートル級の巨大な人形は、南部町正寿寺のほか、十和田市の梅集落と板ノ沢集落で作られていたが、過疎化や高齢化のため、梅集落の人形作りは、平成25年で中断となった。市教育委員会や市文化財保護審議会及び関係諸機関が、存続・継続、さらに文化財指定に向けて動いていたとのことであるが、伝承が途絶えつつある。

梅集落は、板ノ沢集落の西方約3キロの山間に位置し、隣接している。しかし、大きさ、作り方などは酷似しているものの、風貌や供え物等、多少異なることもある。梅集落では、人形の胴体に、ソバ餅を刺す。このソバ餅は、本家が5枚、分家が3枚と決められている。また、板ノ沢集落では、茅人形の足元に、小さい藁人形を供える。

カヤ人形が安置される場所は、本来、旧県道の集落入口に設置していたが、現在、集落を見下ろす小高い丘の上に設置している。新たに道路を建設・改修する度に移動した。また、集落の入口に張るトシナ(注連縄)は、彼岸の3月22、23日に設置する。

集落の中央部に位置する集会所前には、名水が湧き出ており、行事を行う神社は「白龍大明神」で、板ノ沢集落の神社も「御瀧大龍神社」であることから、水に関連しているとも思われる。

(本項の写真は十和田市教育委員会の提供による)

参考文献

- 『青森県祭り・行事調査報告書』 青森県教育委員会 二〇〇七
『青森県民俗分布図』 青森県教育委員会 一九七六
『青森県史 民俗編 資料 南部』 青森県史編さん民俗部会編 青森県
二〇〇一
『東日本の神送り行事 人形にたくした祈りのすがた』 青森県立郷土館
二〇〇二
『浦田の民俗』 青森県立郷土館 一九八一
『日本の民俗 青森』 森山泰太郎 第一法規 一九七二
『虫送り』フォーラム報告書』 長谷川成一編 五所川原市 一九九五
『青森県風土記 美しいふるさと』 東京堂出版 一九八四
『東日本のわら人形(写真集)』 新里源治 フォト民俗社 一九八七
『上郷村郷土史』 上郷村
『田子町誌』 田子町 一九八三
『田子町の文化財』 田子町教育委員会 一九九三
『野辺地町史』 野辺地町 一九九六
『七戸町史』 七戸町 一九八二
『六戸町史』 六戸町 一九九三
『下田町史』 下田町 一九七九
『百石町史』 百石町 一九八四
『三戸町史』 三戸町 一九九七
『名川町史』 名川町 一九八七
- 『東通村史』 東通村 一九九七
『六ヶ所村史』 六ヶ所村 一九九七
『ふるさとなんぶ』第12号 南部町郷土研究会 一九九四
『南部町誌』下巻 南部町 一九九五
『東北町史II』 東北町史編さん委員会編 東北町 一九九四
『ふるさとの文化をたずねて』 十和田市教育委員会 二〇〇四
『安代の民俗誌』 弘前大学人文学部民俗学研究室 二〇〇七
『祭祀行事・青森県』 高橋秀雄・成田敏 桜楓社 一九九三
『サネモリ起源考』 伊藤清司 青土社 二〇〇一
『人形道祖神』 神野善治 白水社 一九九六
『東北の歳時習俗』 三浦貞栄治・森口多里ほか 明玄書房 一九七五
『日本民俗大辞典 上』 福田アジオ他編 吉川弘文館 一九九九
『日本民俗大辞典 下』 福田アジオ他編 吉川弘文館 二〇〇〇
『北三陸のいのち 歴史民俗編22 枝成沢虫まつり』 デーリー東北 二〇〇九年三月八日付新聞記事
『青森県の虫送り行事』(『東北民俗学研究』第6号所収) 大場卓二 東北学院大
学民俗学OB会 一九九八
『藁人形のサイノカミ』(『東北の歴史 第三巻 境界と自他の認識』所収) 大湯
卓二 清文堂 二〇一三
『人形送りの行事』(『東北民俗資料(九)』所収) 岡本弘子 萬葉堂書店
一九八〇

調査協力者(順不同・敬称略)

五戸町役場企画振興課

七戸町役場七戸支所学務課

南部町役場南部分庁舎

東北町役場福祉課

五戸町教育員会

田子町教育員会

十和田市教育員会

岩手県二戸市総合政策部政策推進課情報管理室

坂本瑞男(南部町)

幅野義久(田子町)

穂積倉二(田子町)

工藤順子(田子町)

佐々木一栄(五戸町)

小泉隼人(五戸町)

平健作(八戸市)

門前廣美(八戸市)

下村恒彦(八戸市)

沢目豊(十和田市)

福沢繁雄(十和田市)

大久保学(十和田市)

島川芳樹(岩手県久慈市)

愛木稔(岩手県一戸町)

畠山正徳(岩手県八幡平市)

島守第六区虫追いまつり保存会(八戸市)

横間虫追いまつり保存会(岩手県八幡平市)

豊間内地区コミュニティ実行委員会(五戸町)

豊間内小学校(五戸町)

細野虫追い保存会(田子町)

上郷保育園(田子町)

八戸市南郷区島守第六区のみなさん

十和田市梅集落のみなさん

※執筆者による合同調査等において、ここに名前を記さない多くの方がたから
もご協力とご教示をいただきました。

本書の執筆者・撮影者（掲載順）

成田 敏（1947年生まれ。青森県弘前市在住）

「青森県南部地方の虫送り概要」の執筆担当。

天野 莊平（1949年生まれ。秋田県潟上市在住）

「田子町飯豊の虫ボイ」「田子町細野の虫ボイ」「田子町原の虫ボイ」

「南部町相内の人形まつり」「七戸町尾山頭の虫送り」の執筆担当。

永井登志樹（1952年生まれ。秋田県男鹿市在住）

「田子町石亀の虫送り」「八戸市島守の虫送り」「五戸市豊間内の虫送

り」「岩手県北部地域の虫送り」「南部町正寿寺の人形まつり」の執筆

担当。

田中 寿明（1959年生まれ。青森県東北町在住）

「十和田市板ノ沢の人形立て」「十和田市梅人形結い」の執筆および、

「田子町石亀の虫送り」「十和田市板ノ沢の人形立て」の撮影担当。

鏡 啓記（1953年生まれ。秋田県秋田市在住）

「田子町飯豊の虫ボイ」「田子町細野の虫ボイ」「田子町原の虫ボイ」

「南部町相内の人形まつり」「七戸町尾山頭の虫送り」「岩手県北部地

域の虫送り」「南部町正寿寺の人形まつり」の撮影担当。

渡部 昇（1949年生まれ。秋田県秋田市在住）

「田子町飯豊の虫ボイ」「田子町細野の虫ボイ」「南部町正寿寺の人形

まつり」の資料動画撮影担当。

青森県南部地方の虫送り調査報告書

発行日 平成26年3月31日

発行 文化庁文化財部伝統文化課

調査・作成 NPO法人あきた地域資源ネットワーク
〒011-0945 秋田市土崎港西3丁目9-15-303
TEL.018-816-0610

印刷 株式会社くまがい印刷
〒010-0001 秋田市中通6丁目4-21
TEL.018-833-2220



発行 文化庁
調査・作成 NPO法人あきた地域資源ネットワーク